

翻 訳

ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査
— 1939年、1940年 —川崎 建三^{※1}・山内 和也^{※2}

※1 公益財団法人東洋哲学研究所 ※2 帝京大学文化財研究所

解題

B. バラサグン (アク・ベシム遺跡)

§ 6. 契丹 (カラキタイ) 区の試掘調査

§ 7. 仏教小礼拝堂と僧院

解題

本 翻 訳 は、*Труды семиреченской археологической экспедиции "Чуйская долина"*, составлены под руководством А.Н. Бернштама (Материалы и исследования по археологии СССР, no. 14) Издательство Академии наук СССР, Москва, Ленинград, 1950 [*Trudy Semirechenskoj arkheologicheskoy ekspeditsii "Chuyskaya dolina"*, A.N. Bernshtam (ed.) (Materialy i issledovaniya po arkheologii SSSR, no. 14) Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR, Moskva-Leningrad, 1950] (A. N. ベルンシュタム監修『セミレチエ考古学調査団報告「チュー渓谷」』、ソ連考古学の資料と研究第14輯、ソ連科学アカデミー、モスクワ・レーニンград、1950年) に収録されている。Глава II. Раскопки городов Сарыга, Баласагуна и Якалыга [Glava II. Raskopki gorodov Saryga, Balasaguna i Yakalyga] (第2章 サルィグ、バラサグン、ヤカルィグ市「都市遺跡」の発掘) の一部をなす B. Баласагун (развалины Ак-пешин) [B. Balasagun (razvaliny Ak-peshin)] 「B. バラサグン (アク・ベシム遺跡)」の翻訳である (Bernshtam 1950: 47-55)。なお、この報告は Л.Г. Розина (L.G. Rozina) L.G. ローズィナ) によって執筆されている。

この報告は、かつて「ラバト」、あるいは「契丹区」と呼ばれていたアク・ベシム遺跡 (補図1～4) のシャフリスタン2において1939年と1940年に実施された試掘調査と発掘調査の報告である。表題を見ると、アク・ベシム遺跡はかつて「アク・ベシム」と呼ばれており、かつ「バラサグン」であると認識されていたことが理解される。しかしながら、現在では、このアク・ベシム遺跡は、かつての「スイヤブ」

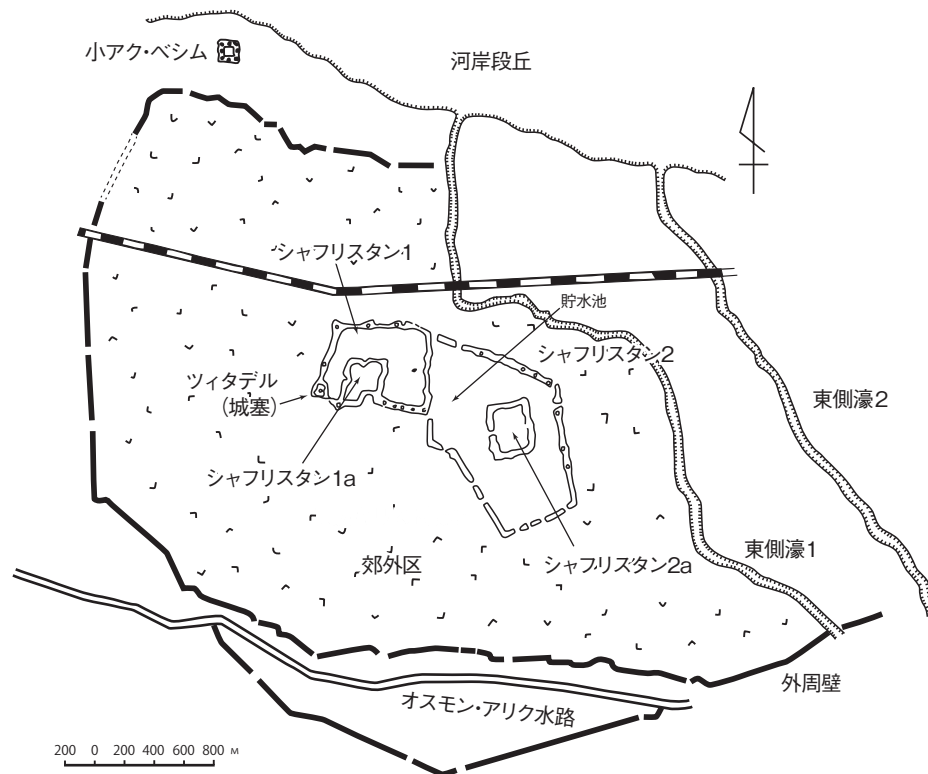
であることが明らかとなっている。また、かつては「ラバト」あるいは「契丹区」と呼ばれ、11～12世紀の街の跡であると考えられた地区は唐が建設した碎葉鎮城であり、一時期、安西四鎮の1つであったことが明らかとなっている。しかしながら、ベルンシュタムによって実施された発掘調査では、施釉陶器といったカラハン朝時代を特徴付ける遺物が建物と一緒に出土したことから、街全体、そして発見された建物が11～12世紀に属するものであると理解されたのであろう。

ベルンシュタムは、このシャフリスタン2において、1939年に6か所で試掘を行った。その(推定される)地点については、カジミヤカが作成した遺跡地図 (補図5) に記されている。これまでは、このカジミヤカが作成した遺跡地図を基に、ベルンシュタムの試掘坑 (△) と発掘区 (□) の地点を推定していたが、この報告を詳細に読み解くと、シャフリスタン2においては、試掘坑1 (△1) の地点を除き、カジミヤカの地図に示された地点 (△2～6、および□1、2) は誤りであったことが明らかとなった。試掘坑2は発掘区IおよびIIの南側、試掘坑3および4は発掘区IIが設定された地点、試掘坑5は、現在ではシャフリスタン2aと呼ばれている方形区画の北部、試掘坑6は発掘区IおよびIIのやや北側に、それぞれ位置していた (補図6)。発掘区IおよびIIはシャフリスタン2aの南西側に位置し、西側が発掘区I、そして東側が発掘区IIであった。これらの試掘坑や発掘区の一部の痕跡については、補図1に示した1966年に撮影された航空写真でも確認できる。

仏教小礼拝堂とされる発掘区IIにおける調査では、試掘坑2、3、4、つまりベルンシュタムが発掘し



補図 1. 遺跡全体 (1966 年撮影の航空写真)



補図 2. アク・ベシム遺跡 (スイヤブ) 全体図および呼称名

た第0 仏教寺院（AKB-0）では、表土層のほぼ直下で、深さ30～50cmの地点で、赤色や灰色の瓦の破片の厚い堆積が確認され、その下層から施釉陶器を含む遺物が出土しており、火災の痕跡が確認されている点が注目される。

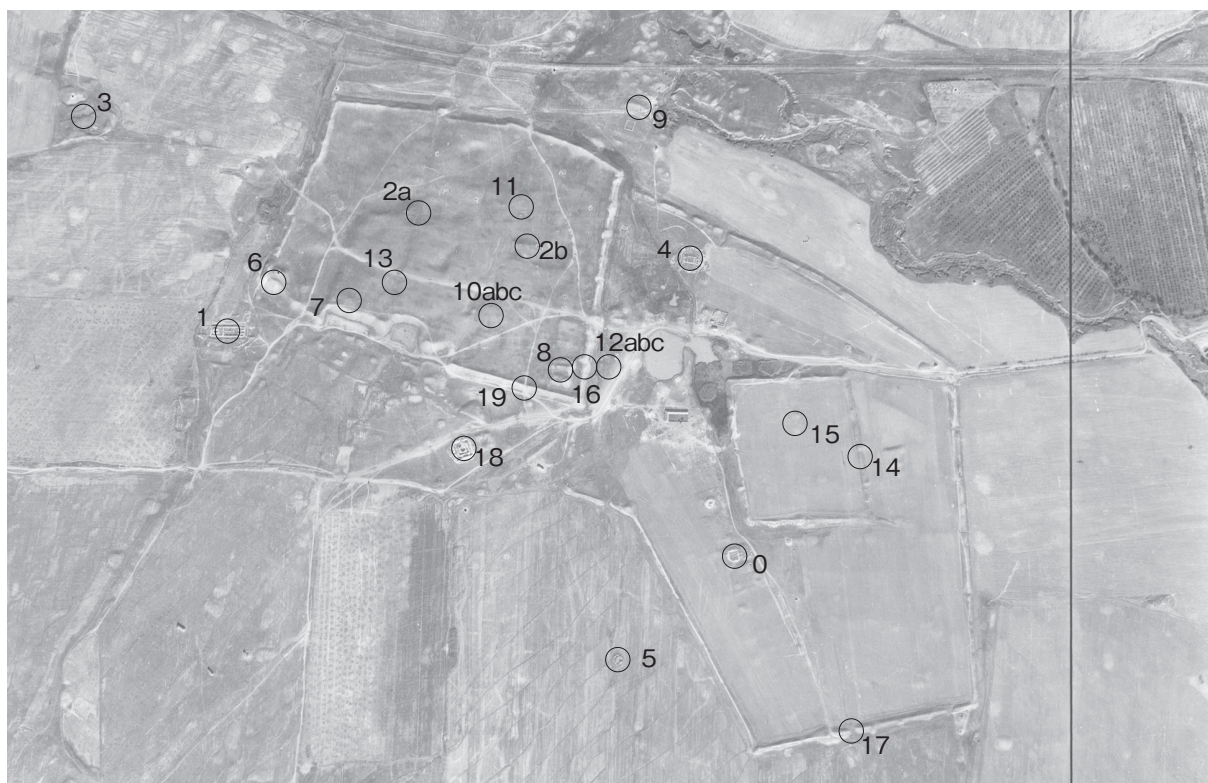
これまでの帝京大学の調査の成果によれば、特徴的な瓦当を含め、ベルンシュタムによる発掘調査で見つかった瓦は唐代、つまり碎葉鎮城が存在していた時期のものであることが確認できる。その場合、施釉陶器といったカラハン朝期、つまり11～12世紀に年代付けられる遺物が、唐代の瓦片の下から出土していることになる。この出土状況は、唐代に建設された瓦を載せた屋根をもつ建物が後代まで残っており、その建物を利用して後代の人たちが生活し、ある時、火災によって建物が焼け落ちたため、時代的に新しい痕跡が瓦片の厚い堆積の下に埋もれたということを示しているものと考えられる。

さらに注目される点は、ベルンシュタムが発掘した仏教小礼拝堂が、いわゆる歴史上に知られる「大雲寺」か否かという点である。「また碎葉城がある。天宝7年（748年）に、北庭節度使の王成見が征伐し、城壁は砕き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主（阿史那懐道の娘。722年12月に玄宗が封じ、

突騎施の蘇祿可汗に嫁ぐ）が「居止」されたところで、大雲寺が建てられており、まだ残存していた（杜環『経行記』碎葉国条）」（柿沼 2018：52）。これは杜環が残した記録であり、碎葉、つまりスイヤブに大雲寺があったという根拠となっている。

これまでアク・ベシム遺跡、つまりスイヤブでは、3つの仏教寺院が発見されている。すなわち、ベルンシュタムが発掘した第0 仏教寺院（AKB-0）、クズラソフが発掘した第1 仏教寺院（AKB-1）、そしてズィヤブリンが発掘した第2 仏教寺院（AKB-18）である。大雲寺がアク・ベシム遺跡のどこに位置していたか、つまりこれまで発掘されたどの寺院が大雲寺に当たるのかについては諸説あり、いまだに結論が出ていないとされることについてはすでに加藤が論じたとおりである（加藤 1997：158-159）。しかしながら、本翻訳にある「仏教小礼拝堂」からは、中国様式の仏像が出土しており、また、近年の調査によって瓦片の年代が唐代、さらには8世紀の後半に比定されるようになった（山内・櫛原・望月 2018：156-157）。

これに対して、第1 仏教寺院と第2 仏教寺院からは中国様式の仏像、そして唐代の瓦等は一切見つかっていない。それゆえ、アク・ベシム遺跡、つま



補図 3. アク・ベシム（AKB）遺跡（スイヤブ）の発掘地点番号



補図 4. ベルンシュタムが作成したアク・ベシムの遺跡地図
(Bernshtam 1950, Таблица XVIII を基にトレース)

リスイヤブに存在したとされる大雲寺は、ベルンシュタムらが発掘した第0仏教寺院である可能性が高いと結論付けることができる。また、この「仏教小礼拝堂」は「小規模のトルトクリ」の内部にあったと記されていることから、「仏教小礼拝堂」を含む建物を取り囲む方形の区画が存在していたものと考えられよう。

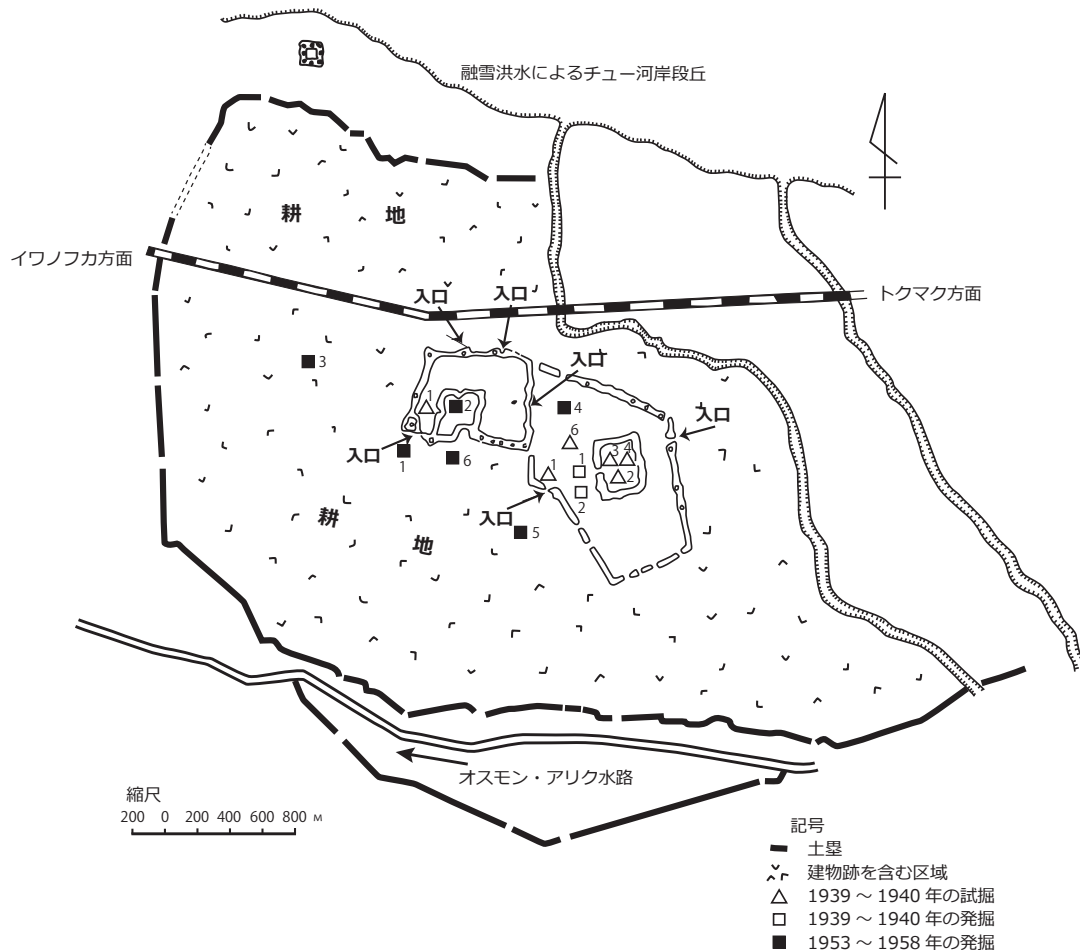
さいごになるが、この報告の翻訳は川崎建三が行い、山内和也がこれまでの発掘調査の成果を基に修正を加え、不明な部分については、川崎と山内が相談の上、最終的に山内が取りまとめたものである。

文中の〔 〕は、補訳として川崎と山内が追加したものである。あらかじめお断りしておくべきことは、原文は簡略かつ難解であり、遺物の図版についての言及も部分的に欠けているため、訳文では、意味が曖昧であったり、やや不明であったりする部分が少なくない。そのため適宜、訳註を付した。この報告を翻訳することの重要性に鑑み、ご容赦願いたい。また、本翻訳について、ご叱正をたまりたく、お願い申し上げる。

文献

- Bernshtam, A. H. *Trudy Semirechenskoy arkheologicheskoy ekspeditsii "Chuyskaya dolina"*, Materialyi i issledovaniya po arkheologii SSSR, No 14, 1950, Moskva-Lenigrad. 1950
- Kozhemyako, P. N. *Rannesrednevekovye goroda i poseleniya Chuyskoy doliny*, 1959, Frunze.
- 柿沼陽平 2019「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集 2019. 43-59.
- 加藤九祐 1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究 Vol.4 シルクロード学研究センター 1997.
- 山内和也、バキット・アマンバエヴァ責任編集『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡—2011～2014年度—』キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 2016.

- キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所・帝京大学文化財研究所『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査 2016』2018.
- 山内和也・櫛原功一・望月秀和「2017年度アク・ベシム遺跡調査報告」『帝京大学文化財研究所 研究報告』第17集 2018 121-168.
- 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所『アク・ベシム（スイヤブ）2017』帝京大学シルクロード学術調査団 調査研究報告 2019.



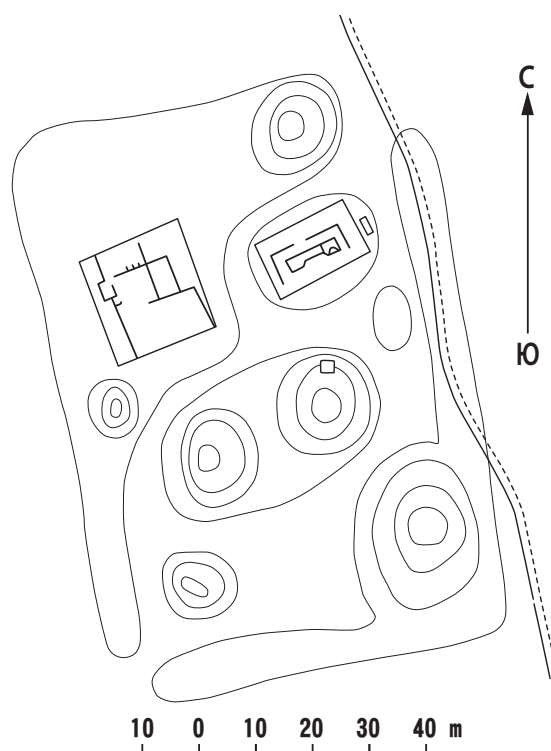
補図 5. カジミヤカが作成したアク・ベシムの遺跡地図（Kozhemyako1959: Рис. 2 を基にトレース）



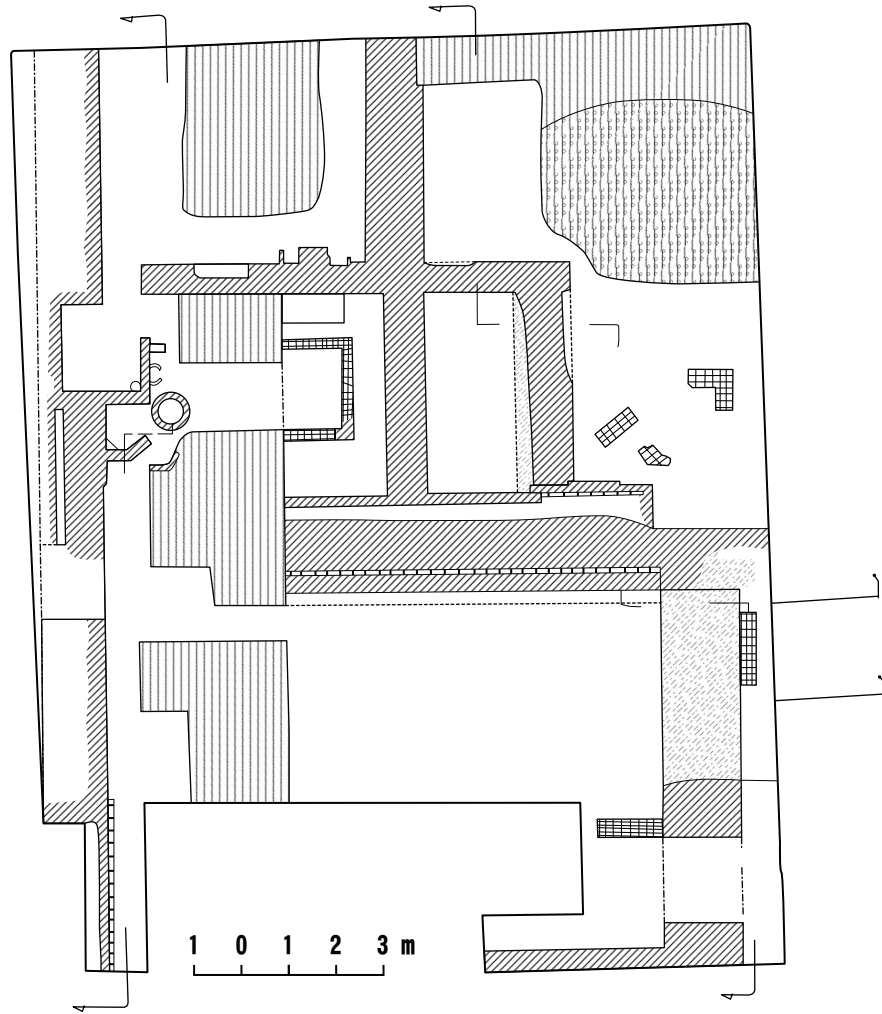
補図 6. 推定されるベルンシュタムによる試掘坑および発掘区の位置



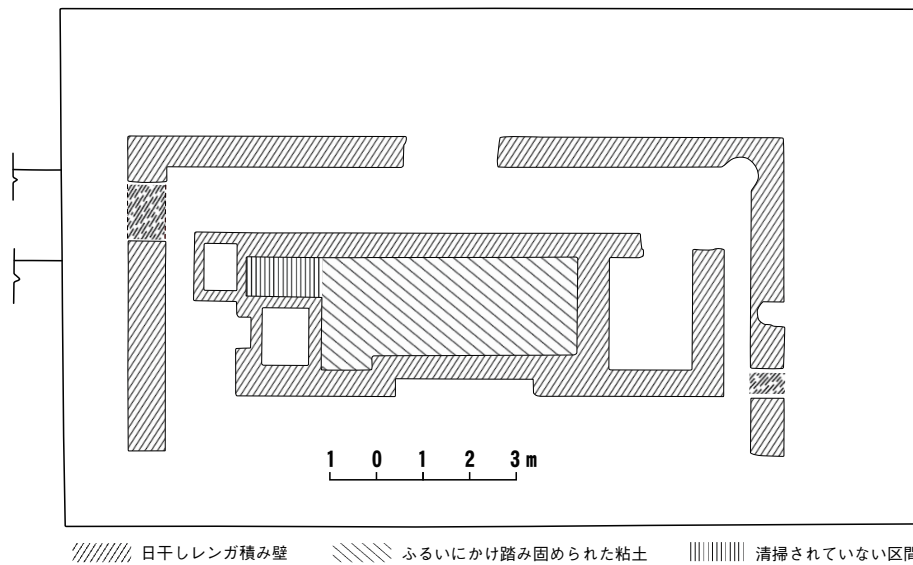
補図 7. 発掘区 I および発掘区 II
(1966 年撮影の航空写真)



補図 8. トルトクリ、発掘区 I および発掘区 II の平面図
(Bernshtam 1950, Таблица VII-6 を基にトレース)



補図9. 発掘区Ⅰ平面図（Bernshtam 1950, Таблица VII-7 を基にトレース）



補図10. 発掘区Ⅱ平面図（Bernshtam 1950, Таблица VII-8 を基にトレース）

B. バラサゲン（アク・ペシム遺跡） （図 XVIII ～ XXVII）

§ 6. 契丹（カラキタイ）区の試掘調査

都市遺跡バラサゲンのシャフリスタン1の東側に接し、土塁で囲まれ、シャフリスタン1よりも広大な面積をもつ区画が南側一帯に広がっている。^{訳註1)}この区画の地表面で採取された遺物の中には、湾曲した内面に布目痕をもつ灰色の丸瓦の破片が見られた。A. N. ベルンシュタムによれば、この区画は契丹族の統治時代に設置された都市バラサゲンの一部であると推定されていることから、仮に契丹区〔シャフリスタン2〕と名付けられた。^{訳註2)}本稿で扱う調査の記述にあたっては、便宜上、この用語〔契丹区〕を用いることとする。

1939年および1940年に調査隊が活動を行ったのは、都市遺跡のこの区画〔シャフリスタン2〕のみである。

試掘坑 1、2、3、4（1939年）

試掘坑 1

契丹区の南西隅にある小高い丘に3×2mの試掘坑〔1〕が設置された。^{訳註3)}〔この試掘坑は〕もっぱら測量のための事前調査の性格を帯びていた。開墾され、膨大な量の灰色の瓦の破片が散乱する地面の下を発掘した際、少量の無釉土器片と日干しレンガ片からなる土層が検出された。これらの遺物は、この丘が区画〔シャフリスタン2〕と同時代に〔存在した〕かつての建物の痕跡であるという仮説を裏付けるものであった。

試掘坑 2

都市遺跡の契丹区における踏査の際、113×64mの大きさをもつ小規模な長方形のトルトクリを確認した。^{訳註4)}その中央部には、面積〔大きさ〕35.50×21m、高さ1.50mをなす、頂部がわずかに窪んだ細長い丘があった。この丘の裾野の南側には別の複数の丘が接していた。〔この南側の丘の〕南斜面に3×2mの試掘坑2を設置した。^{訳註5)}地表から深さ0.30～0.55m地点で、おもに赤土からなる瓦片層が検出された。また、そこからは素焼き製のコーニスの破片が検出された。^{訳註6)}表側には幅が広く、深い彫り込みがあり、裏側には固定するための複数の孔があった。^{訳註7)}

日常生活に用いられた遺物は見つからなかった。瓦〔片の層〕の直下ではいくつかの染み状の木炭が^{訳註8)}検出された。

深さ1.40mの地点では、日干しレンガ（厚さ6.5～7.5cm）が集積した厚い層が現われた。このレンガの遺構をもって試掘を終了した。試掘で出土した遺物は、この地点には明らかに大型の建物の痕跡があり、研究のために発掘を行う必要があることを示している。

試掘坑 3 および 4

この2つの試掘坑（大きさはそれぞれ2×3m）は、上記の試掘坑2の北側に位置する〔小規模な〕トルトクリ内の別の丘に設置された。^{訳註9)}これら試掘坑で出土した遺物は試掘坑2の設置後に推測した私たちの仮説を裏付けるものであった。すなわち、深さ0.50mの地点では、灰色と赤色の丸瓦の〔破片の〕厚い層が検出された。試掘坑4では、軒丸瓦が出土した。瓦〔片〕の層の下には、いくらかの日干しレンガと石灰製の漆喰の碎片が広がっていた。また火災の痕跡が検出された。

1940年には、この丘に発掘区Ⅱが設置され、11～12世紀の仏教信仰を示す建物が検出された（発掘区Ⅱの記述を見よ）。

試掘坑 4 および 5（1940年）^{訳註10)}

契丹区の中央部には、低い土塁で区切られた正方形のトルトクリの広大な区域が位置している。^{訳註11)}契丹区の全体は種まきのために開墾されており、またトルトクリ内の土地も開墾されていて、ごくわずかな丘が残るだけである。

試掘坑5はトルトクリの北側部分にある直径23mの丘に設けられた南北方向に掘削したトレンチで、〔大きさは〕10×2mである。^{訳註12)}トレンチでは日干しレンガ積みの建物の一部が検出された。地表から深さ1.25m地点には建物の床があった。建物の角をなす2つの壁の厚さには違いがあった。すなわち、南北方向の壁は厚さ0.84mあり、トレンチで断ち割られた東西方向の別の壁は厚さ1.30mであった。トレンチの北側でも日干しレンガ造りの壁が検出された。部屋の床は無釉の土器片、瓦、動物骨でぎっしりと埋まっていた。日用品の遺物としては、環状の把手をもつ赤色胎土の無釉の円形灯明皿の断片だけが出土し、その他の遺物は屋根瓦の破片

であった。トレンチの北西隅では、（厚さ 10cm の）
床に穴〔サブトレンチ〕が開けられ、床下から深さ 1.70m まで地山が続いていることがわかった。これをもって試掘を終了した。この試掘調査によって、11～12世紀の契丹時代に存在した日干しレンガ造りの建物の一部が明らかとなった。これらの建物の下では、より早期の集落の痕跡は見つからなかった。

試掘坑 6

試掘坑 6 は、発掘区 I と II から北に約 60m の場所に位置する円形の高い丘の中央に設けられた。試掘坑の大きさは 4 × 4 m である。表土層の下には明らかに建物の壁が崩壊した痕跡と思われる日干しレンガの崩壊した層があった。この層の厚さは 1m であった。その下方では地表から 3m の深さまで達する建物の一部が検出された。建物の壁は大型の〔パフサ〕ブロックと日干しレンガで構築されていた。南北方向に発掘区を横切る壁で、幅 1m、高さ 1.80m のヴォールト天井が検出された。また、〔パフサ〕ブロックの壁は南北方向に伸びていた。これは 2 列のブロックからなり、2 つの列は交差するように構築されており、突き出すような形となっていた。試掘坑の規模からすれば、検出された建物のプランについては、部分的であっても判断することは難しい。

この試掘坑から出土した土器は無釉の器の破片だけであり、2 つのグループに分けられる。

a) 小型と中型の土器

小型と中型の土器については、磨研が施されたものが多数を占めている。薄手（3mm）の細頸状の黄色磨研土器片（径 13cm）には赤色顔料の痕跡が残っている。口縁端部が下方にわずかに垂下し、頸部に連珠円文からなる装飾帯がめぐっている。細頸土器片（径 8.1cm）は上述の土器と同型で、黄色磨研の無文の土器である。薄手の小型土器（径 12.8cm）は胴部から細頸まで残存し、その形状は牛乳瓶を想起させる。胎土はバラ色を呈し、磨研の跡は見られない。薄手の細頸土器片（径 16.7cm）は、口縁端部が若干屈曲し、胎土はバラ色を呈し、黄色磨研土器である。頸部に沿って、平行する溝〔沈線〕からなる文様帯がめぐり、その間に波状文様が施されている。脚付き杯に類した土器片は、〔大きさ〕口径 30cm、器壁 8mm であり、胎土は粒状で黄色磨研が施されて

いる。肩に凹線のある小型の長頸土器片（径 8cm）は黄色磨研が施されている。器壁 5～7mm の大型土器の頸部片（径 20cm）は、黄色磨研が施されている。

b) 甕、蓋、把手

無文の角張った甕の口縁部が数点出土している。口縁部が外反し、内側が直角に折れ曲がった形状を呈する。甕の頸部の直径は 38～43cm である。胎土はきめ細かく、器壁には黄色と赤色の化粧土が掛けられている。甕の蓋の破片には沈線による単純なもみの葉模様が施されているが、波状文や円文も見られる。7 × 4cm の環状の把手は大型土器に属する。黄色と赤色の化粧土が掛けられている。

このように、試掘坑 6 では、部屋側に日干しレンガの壁をとまなう〔パフサ〕ブロックの壁とヴォールト天井からなる比較的古い時代の建物を覆う、上層の日干しレンガ積みの建物が検出された。〔下層の〕この古い建物では、無釉の磨研土器が出土していることを特徴とする。ここに挙げた情報に基づけば、下層の建物はソグド人がセミレチエに入植した時代である 7～8 世紀に属し、一方、上層の建物、つまり、試掘坑 6 で検出された壁の崩壊層はおそらくイスラーム時代に属するものと推定されるべきである。

§ 7. 仏教小禮拜堂と僧院

（発掘区 I および II、〔図 VII-6～8、〕図 XIX～XX、XXII～XXVII）〔補図 8～10〕

a) 僧院の居室（発掘区 I）〔補図 9〕

山麓の靱皮繊維工場に向かう道路の西側に位置する契丹区の土塁の内側には、〔別の〕土塁で囲まれた、いくつかの低い丘がある小規模のトルトクリが存在している。北西隅からトルトクリの内側に向かって、細長い丘をいだく、小高くなった広い土地が広がっている。ここに、発掘区 I（10 × 7m）を設置したところ、狭小の貯蔵室数室と多量の日用品とともに、日干しレンガ積みの厚い壁からなる建物の一部が検出された〔図 VII-6、7、XIX-2～5〕。芝土の腐植土の下に堆積する固い土層の中には、多量の灰色土器の破片と少量の無釉の土器の破片が混じっていた。深さ 0.80m 地点では、ぎっしりと積んである日干しレンガ積みの壁が検出された。深さ 1m 地点では、発掘区の全体に大型の日干しタイル（大きさ 40

×28×10cm）が敷き詰められていた。^{訳註19)}この敷き詰められた面の上で発見された遺物の数はごくわずかであった。灰青色の調理用土器の断片（見つかった瓦も同じような「灰色の」土で作られている）、薄手の皿の断片、甕の口縁端部、屈曲した突出部分の下に貼付された波状文や指頭押圧痕のある大型土器の破片、^{訳註20)}大型土器の縦長把手の断片、内側に布目痕が残る数多くの灰青色・灰色瓦の断片である。

発掘区の西壁際の深さ1m地点では、日干しレンガで作られた硬化面において矩形の小部屋（2.00×1.50m）が検出されたが、その三方に日干しレンガ（同サイズのレンガ）で構築された仕切り壁があり、最上段だけが灰色の焼成レンガであった。^{訳註21)}この部屋の中は崩落した日干しタイル「の破片」で埋まっていた。タイルを取り除くと、その下、つまり土の堆積の中からはさまざまな日常的に用いられた遺物が出土した。深さ1.10m地点では、錆びた薄手の銅製品の破片が出土したが、これは腰帯に縫い付けたものかもしれない。また、バラ色砂岩製（？）の半円柱形の柱頭の断片が出土した（発掘区Ⅱの石彫の記述を参照のこと）。隣接する部屋では瓦に付く高浮き彫りのスタンプ文様が施された丸板の断片、そして残存状態の悪い錆びた鉄製品—長さ7cmのナイフと大型ピン—が出土した。また、以下の土器も出土した。深さ1.10m地点では、緑青色の带状文様をもつ白色釉大型坏断片、^{訳註22)}深さ1.40m地点では小ぶりで薄手（器壁0.4cm）の明褐色胎土の器が見つかった。この器の口縁部は鋭角を呈し、両把手は欠けていた（大きさは径5.8cm、高さ6cm）。

深さ0.80m地点で検出された複数の壁は下方に続いていることが確認された。東西方向に伸びる壁は、非常に幅広で、（垂直方向に）部分的に残存していた。その壁は基底部で幅2mを計測した。（南西から北東へ伸びる）別の2本の壁は、より狭小で、1本の壁の幅は1.30mであった。^{訳註23)}壁の方向に沿って北側に拡張した発掘区（面積30㎡）でも連続する同じ層が確認された。すなわち、深さ0.80m地点で日干しレンガ、深さ1m地点では日干しタイルが検出された。またタイルの上からは錆びた銅製品の破片、錆びた鉄、小型の碗、屈曲した鉄製品、白色釉の施された大型の坏「碗もしくは鉢」の断片—中央部の発掘区出土土器と類似—、半分に割れた中央に穿孔のある（中国製？）コイン、3本の沈線装飾と貼付け把手をもつ表面が焦げた土器片、装飾文

入り無釉蓋、バラ色石製の建築装飾断片、濃褐色の釉薬が掛けられた「陶器の」底部の断片、染み状の灰、そして窯「の壁体」の破片が見つかった。最初に設定した発掘区を掘り進めたところ、その北側では類似する資料—カラハン朝時代の土器片（様式化された文字文様をもつ白色施釉土器）、革ベルト用の銅製バックルの錆びた先端部、そして用途不明の鉄製品—が発見された。

中央部で直立した2mの（東西方向の）2本の壁に挟まれたあるセクションでは、地山に至るまで、すべての層を掘削した。2mの深さまでは、大壁を構築する日干しレンガ積み^{訳註24)}の遺構が確認された。この地点では礫、瓦片、大型鍋の断片が混在した堆積層が検出され、深さ2.30m地点まで確認された。その下は地山で、2.70mの地点で掘削作業を終了した。^{訳註25)}

部屋の東壁と発掘区の東壁の間の発掘区では、深さ1.30m地点で、有孔銅貨と鉄製の刀子が見つかった。さらに数個の焼成レンガで構築された3つの列を検出したが、その用途を明らかにするには至らなかった。

中央の「東西に伸びる」大壁で、地表面に浅く敷設された数列の細長い煙道管「炕」が見つかったことは非常に興味深い。^{訳註26)}1つは、南側にある煙道管で、出土した壁の側面に沿って続いており、厚さ15cmの礫と砂の中に埋められていた。北側では一部の区画でのみ同じような煙道管が確認されているが、それは壁の外側の境界「側面」により近い場所に位置していた。

西壁の南側の側面に沿って、床面でも狭い隙間が検出されている。この隙間のやや近くの床面では鉄製の鎌が出土した。

発掘区の南には東西方向に伸びる2mの壁があり、数十平方メートルの比較的広い敷地が広がるが、個別の部屋は検出されなかった。ここではおびただしい数の土器片や動物骨が見つかり、深さ1.35m地点では（中国製）方孔銅貨が見つかった。この場所は建物の中庭であった可能性がある。その東側は、幅1.50m、長さ7.20mの壁で仕切られていた。仮に、西壁の端に幅広の北壁が接し（未発掘区があるので現時点では不明だが）、さらに、まだごく部分的にしか検出されていない「長さ」5mの南壁（これもまた狭い試掘坑では内側の境界線「側面」だけが検出されている）が「西壁に」接していたとすれば、

この中庭の大きさは7.20×11.30mとなるであろう。中庭の東壁はわずかに部分的にしか残っていなかったものの、上述した遺構の全長から、その痕跡は明瞭に確認できる。焼成レンガで構築された、長さ1.50mの2列の遺構は興味深い。このレンガは灰青色で、大きさは35×16cmであり、中庭の床よりもはるかに高いレベルに設置されていた。それらは敷居の役目を果たしていたか、もしくは導管（か？）の一部であった可能性がある。

発掘区の全体にわたって西側に設けられた幅5mのサブトレンチでは、ほぼ同じレベルで、トレンチのほぼ半分を占める場所で日干しレンガ積み遺構が検出されたが、きわめて小規模であった。

発掘区の西壁にほとんど密接するように、部屋の西壁（幅1.50m）が出土したが、この壁は発掘された建物の外壁をなすものかもしれない。壁の中央付近では貯蔵用の小部屋数室が検出された。しかもある部屋は1.90×1.65mの広さしかなく、厚さ0.90mの壁がはめ込まれていた。この地点では、地表から深さ1.40m、固く締まった土の床面上で、頸部と脚と把手が欠けた無釉の小型の急須型土器（7×8cm）の破片が見つかった。〔部屋の〕隅で円形の土管（長さ31.5cm）が出土しているが、内面が焦げていることから、この土管は煙突として利用されたものである。胎土は屋根瓦とおなじような灰青色であり、内面には布目痕が認められるので、製作技法は〔屋根瓦と〕同じであることは明らかである。床面では、虎やライオンの掌の形をした土製の灯明皿の断片が出土した。砂礫の混じった胎土で、ひどく焦げていた。この部屋の東壁と南壁の一部は非常に薄く、1段積みの〔日干し〕レンガ（幅13cm）で構築されていた。

〔この小さな部屋の〕東側の壁の裏側〔西側〕には竈が設置されていたが、2基の小型の竈は壁に造りつけられ、1基は大型の円形のタンディル〔パン焼き竈〕で残存状態がよく、上方がやや狭まった形状を呈していた（径0.65m、高さ0.64m）。深さ1.40mの地点の床面では銅製のボタンが見つかった。きわめて狭小の部屋（1.00×1.00m）が東側からタンディルに接した状態で検出され、そこでも多量の土器が出土した。深さ1.26mの地点では、細頸と扁平の把手をもつ無釉の小型水差しの断片が出土したが、それは隣接する部屋で出土した「急須型土器」と同じ大きさ（7×7cm）であった。また（南東の）隅で

は深さ0.70m地点で内面が焦げた、楕円状の大瓦〔丸瓦か〕（0.40×0.24m）が出土したが、おそらくその下でも竈〔^{訳註31} 炬〕が設置されていたのであろう。床上には灰の痕跡、同じ形の焼成レンガが検出された。また端部が立方体になった青銅ピンも出土した。円形タンディルから北に2.10mの地点では、幅0.70m、長さ4.30mの日干しレンガ（粘土を叩き付けたものか？）の壁が検出された。この壁は西側に入り口となる通路（幅0.70m）があり、中央の大壁に平行して南西から北東に伸びていた。その北の端には〔北側に沿って〕いくつかの竈があり、2基の竈は、扉状通路から西に、2.50mの間隔で設置され、小さな日干しレンガ壁によって仕切られていた。竈は、日干しレンガ壁に直交するように置かれた日干しレンガで構築されていた。

この壁全体に沿って、通路から上述の竈にいたるまで、大量の無釉の完形の器と施釉陶器の断片が発見された。とりわけ出土品の多くは通路で発見された。すべての遺物は深さ1.20～1.30mの地点の硬化面で出土し、部屋の床の一部は染み状の灰で覆われていた。通路の入り口そのものの傍らでは、染み状の灰の上、深さ1.25m地点で、高台から外側に屈曲し、低い〔高〕台をもつ、白色釉の^{訳註32} 杯の破片が出土した。大きさは、上部の径11.5cm、底径4.7cm、高さ4.5cmである。やや北よりの、深さ0.85mの地点では、穿孔をもつ9×14mmの黒色ビーズが出土した。東よりの同じレベル、染み状の灰が集中した場所では、焼成レンガの堆積と無釉の土器の破片が検出された。さらに、坏から約1m、壁から0.70m離れた場所では、細い頸部（1つは底部も欠けていた）と縦長の把手をもつ2つの大型水差し（深さ1.10m地点）が出土し、それらのうち1つの胴部は洋梨状に伸びた形状をしていた。同じく割れた無釉土器の断片と白色釉の陶器片、カラハン朝時代の彩色土器の破片が見つかった。壁の傍らでは、内面が焦げた灰青色の瓦が見つかったが、それは西側の部屋のものと同じように、壁際の竈の上の煙道管として利用されたのかもしれない。さらに北側1m、深さ1.30mの地点で出土したこのグループの遺物は、細い頸部の一部が欠けた、水平に2条の沈線がめぐり、胴部の張り出し部分に幅広の扁平の把手が垂直についた水筒型の大型水差し3点である。^{訳註33} 器高は35.5cm、底径14.8cm、胴部径26cmである。その隣には縦長把手のついた、肩に2条の沈線がめぐり、楕円状胴部

をもつ小型の水差しが横たわっていた。頸部には円形の小さな穿孔があった。胴部の〔残存〕器高は11.5cm、〔胴部〕径13.5cm、底径7.5cmである。3つ目の完形土器は、同じく楕円状胴部を呈し、肩に2条の沈線がめぐり、頸部が欠損し、口縁端部が若干角張ったもので、器高21cm、〔胴部〕径20cm、底径12cmである。縦長の両把手は欠損していた。

東側の竈では直に、肩部にS字形のスタンプ文様がめぐり、水差しの胴部が出土したが、黄色磨研土器の表面には赤色顔料が残っていた。

この竈の傍ら、深さ1.50mの地点では、洋梨形胴部、細頸、縦長把手をもつ細長い水差しが出土した。器高45.5cm、胴部径24cm、頸部径8.5cm、底径13.4cmである。深さ1.30m地点よりもやや高い場所では突騎施の方孔銅貨と指輪が出土した。

この水差しから北東に約1.50m離れた地点、部屋の東壁の傍ら、深さ1.50mの地点では、上部に皿の一部がつき、三脚をもつランプが出土した。^{訳註38)} ランプの高さは10cm、皿の深さは2cmで、砂が多く混じった土で作られていた。

以上で、発掘された部屋で発見された遺物はすべてである。

部屋の東に接する壁の反対側では、深さ1.40mの地点でも検出された硬化面が続いていた。ここでは白色や褐色の施釉土器の小片が若干出土したが、そのうちのいくつかは文字状の文様で装飾されており、螺旋状の花文様が描かれた底部片－カラハン朝期の土器としては典型的な作例－と錆びた鉄製のナイフが出土した。北東隅全体は、〔深さ〕2mまで砂礫をとまう固い土層で覆われていたが、これは特別に固められた敷地の痕跡かもしれない。ここではいかなる遺物も見つからなかったことから、この地点を深く掘り下げることはしなかった。

発掘によって、明らかに居住用と思われる施設の一部が検出されたが、得られたデータが不十分であるため、現時点では、全体のプランは完全には明らかになっていない。発掘された部屋でさえも、そのプランは十分には明らかでない。建物の残りの部分は、2本の壁が伸びる、発掘区の北側に位置しているのであろう。

北西隅には、調理場としての台所施設が配置していた。南部分は中庭によって占められ、おそらく、そこから東側の小礼拝堂に向かう通路が設けられていたのであろう。北東隅はこの建物の外側の角にあ

たる可能性がある。

発掘された建物は、出土資料（カラハン朝期の施釉陶器、突騎施のコイン、無釉の土器）に基づき、11～12世紀に年代付けられるかもしれない。

検出された一連の宗教施設（発掘区Ⅱ）と遺丘全体のプランによれば、発掘区Ⅰで発見された部屋は、仏教僧院の台所施設であり、このトルトクリの全体を構成する一部である。

b) 仏教小礼拝堂（発掘区Ⅱ）

〔図 VII-6、8、図 XIX-1〕〔補図10〕

鞆皮繊維工場の道路沿いに位置するトルトクリの内側の北丘は、発掘区Ⅱ〔の調査〕によって明らかにされた。21.50 × 12.50mの小規模の楕円状の丘には、長軸方向に沿って東西方向の2 × 2.5mの狭いトレンチが開けられた。東側のトレンチは1939年の試掘坑3と試掘坑4まで伸びていた。トレンチは調査のために設けられたもので、その目的は壁の検出であった。

発掘区Ⅰの東壁から9mの地点では、厚さ0.30mの薄い表土層を剥がすと、崩落した（赤色と灰色の）^{訳註39)} 屋根瓦の厚い層が現れた。瓦の層は場所によって10～15cm、あるいは20～30cmに達していた。瓦の層の直下、発掘区Ⅰの東壁から12.5mの地点では日干しレンガ積みの壁の建物が検出され、その後、発掘区Ⅱでは検出された壁に沿って掘り進められた。建物は激しく崩壊していた。建物の遺構を覆っていた瓦と土の堆積層の中、およびその床上には黒い炭と灰の集積－火災の痕跡－があった。壁は、深さ0.68m地点の床から0.20～0.50mの高さまで残存していた。

検出された建物の大きさは14 × 6.5mであり、2列の平行する壁が東西に伸び、矩形の部屋を構成していたが、南壁は崩壊していた。厚さ0.65mの西端の部屋の西壁と東壁を除けば、壁の厚さは0.40mであった。矩形の部屋は厚さ0.65～0.95mの外壁に囲まれている。（それ〔矩形の部屋〕から0.50m離れている東壁を除けば）〔外壁と〕それ〔矩形の部屋〕は1.50m離れており、壁の内側に沿った細い通路をなしていた。外壁の北壁部分（厚さ0.65m）が検出されたが、それに沿って、壁の半分の長さまで床上に幅0.24mの粘土製の突出部－^{訳註40)} 腰掛〔スーファ、つまりベンチ状遺構〕が出土した。西壁と東壁の厚さは0.95mであった。部屋の全体を見ると、

南北方向に伸びる壁は、東西方向に直交して伸びる壁よりも分厚く構築されていた点が注目される。これはとても偶然の産物とは考えられない。このような積み方の理由を理解するためには、建物群全体を発掘する必要があるものの、現時点では、これは地震（？）に対する建物の耐久性のために作られたものかもしれないと仮定することしかできない。建物の南側の外壁は検出されず、その近辺でも見つけることができなかった。〔南側の外壁は〕完全に崩壊してしまったか、あるいは、急に途切れている西壁や東壁と同じように、隣接する南丘（1939年に試掘が行われた。試掘坑2の記述を参照のこと）まで続いていたのかもしれない。それゆえ、南丘の下には宗教施設の廃墟が残存していた可能性を想定せざるを得ない。

壁は、 $24 \times 17 \times 6$ cmと $33 \times 20 \times 7.5$ cm規格の日干しレンガを用いて、平積みで構築されていた。いくつかの箇所では、レンガ積みの下段が焼成レンガ（寸法 $34 \times 16.5 \times 5.5$ cm）であったが、これはカラハン朝時代の日干しレンガ積み建物の構築の際によく用いられていた建築技法である。〔矩形の〕建物の内部では、上述の1室だけが検出されたが、その西の部屋は半壊した北壁を合わせて〔大きさ〕 2.36×1.62 mであった。東側部分には、部屋とは呼べない複数の小規模の部屋が配置されていた。それらのうちの1つは 1.05×0.74 mの大きさで、1段積みのレンガ（幅0.20 m）の壁で構築されているが、明らかに、〔当初の〕建物の構築に際しては計算に入っていなかった。なぜならそれは西側の通路を遮っており、かつやや遅い時期に増築されたものであることが明らかであるからである。2番目の部屋の大きさは 1.25×1.00 mで、やや大きく、建物の内側、南西隅に位置している。その西壁の中央部の外側には、 0.60×0.35 mの奥行きをもつ壁龕が設けられていた。この部屋の床上10 cmでは、埋土中から以下の遺物が見つかった。黄色の線条と赤色斑点入りのペーストのビーズと素焼きの水差し－高さ16.5 cm、胴径18 cmの縦長把手のつく楕円状胴部に平底の土器で、細頸（直径10 cm）を欠損する－である。

これらの小規模の部屋、そして部屋の北壁および南壁の間の土層はすべて、ふるいにかけられたようなきれいな土で、突き固められていたが、この層については発掘しなかった。^{訳註41)} 確認できる限りでは、この場所は南壁と北壁から、レンガ1個分－0.20 cm離

れている。^{訳註42)} この発掘区の南壁付近では、赤色の緻密な胎土で成形され、小さな高台（直径6.5 cm）をもち、胴部（直径11 cm）が垂直方向に扁平し、楕円形をした小型の器が見つかった。この発掘では日用品の遺物や土器はきわめて少なかった。上記の遺物の他には、埋土中からは無釉で平底（直径6 cmと4 cm、高さ3 cmと2 cm）の小型の灯明皿〔皿型のランプ〕の断片2点、幅広の丸底の土器片（直径0.45 m）、伸びたループ状の把手と口縁部の外側に2条の撚り紐状のものがついた、浅い盥型土器の破片、一端が広がった細い素焼きのラッパの断片2点である。〔この素焼きラッパの断片は〕ごく最近までイスラームの礼拝堂で使用されていたブシュハムと^{訳註43)} 呼ばれるラッパに似ていることから、おそらく礼拝の時間を住民に知らせるために使用されたものと考えられる。同一個体の2つの断片は、一端（径11.5 cm）が広がり、別の端（径4 cm）に向かって狭まる、長さ21 cmの管状の断片である。管の表面はすべて、三角形、四角、円形のスタンプ文様で装飾され、水平の突帯が^{訳註44)} 施されていた。^{訳註45)}

この発掘で出土した日用品としての土器片のリストは以上である。

発掘区で出土した、〔その他の〕石製、土製、そしてアラバスター製の建築装飾の断片は実に興味深いものである。

粘土製建築部材

（図 XXII、XXIV、3－XXV－XXVI）

塑像の断片や粘土製建築部材の断片は、おもに北側と東側の通路、床上約10.5 cmのレベルに集中していた。断片はすべて小型で、脆く、大量の埋土からの採取には大きな困難をともなった。

もっとも大きな断片は彩色された衣服をまとう塑像の脚の部位であった。脚に沿って楕円状の太い襷が垂れ下がっている。これは11～12世紀の東トルキスタンの美術に見られる衣服の表現に用いられた典型的な手法である。

埋土からは、露出あるいは衣服の襷で覆われた塑像の手の部分、細かい垂直の襷が表わされた衣服の裾の部分の数多くの断片、青色、黄色、赤色、緑色の美しい花柄文様が描かれ、赤色や白色で彩色された衣服の断片が^{訳註46)} 見つかった。

塑像の頭部断片^{訳註47)} が出土した。それは、毛髪を表わした渦状の彫刻で覆われた円錐形の小さな塊の断

片、目尻が下がり、大きく飛び出した眼球、額に深く斜めに小じわが描かれた切れ長の目（9.5×4cm）の断片である。これらの断片には青色顔料の痕跡が残されていた。

東側の通路では、菩薩像や仏像の台座に特徴的な、周囲が蓮弁で囲まれ、彩色のない土製の大型の蓮華座の断片が発見された。

彩色痕があり、布を表現した極小の断片も出土したが、この時代の仏教礼拝堂や寺院でよく見られるように、かつてここに描かれていた聖なる像〔仏像〕の断片かもしれない。壁画の布の形状を復元することは不可能である。

もともとの建物の建築装飾の断片がバラバラになって残っていたが、これは信仰〔礼拝〕用の塑像よりもさらに小さなものであった。

北側の通路の床面では、その南壁に密接した状態で、帯文のある3/4面観の径7.5cmの土製の柱の断片が出土した。この小さな柱は、藁あるいは結ばれた縄状のもので芯に固定されていた。これは柱の内側の穴の側面に残る痕跡から確認できる。建物の南東の角、東壁の断面では、火を受けた土製の建築装飾の断片が大量に見つかった。ここでは、焰で赤茶色に焼けたアカンサスのパルメット〔唐草文〕の端部と渦巻型装飾の断片が見つかった。東側の通路でも青色顔料の痕跡が残る、断面形を装飾した建築部材の小さな断片が出土した。中央には丸い蓮（径11cm）の形が表わされ、赤色、黄色、青色顔料で彩色され、その葉から分岐した台座をもつものであったが、その他の部位はきわめて小さな断片であった。^{訳註48)}

アラバスター製の建築部材（図 XXIV-1）

これはもっとも数が少ない一群である。最大の断片は東側の通路から出土した。その1つは凹形を呈し、なだらかで、幅が広く、前方に突出した6.5cmの縁があり、その横の平坦な部分には4×4cmの2つのこぶ状のものが貼り付けられている。これは明らかにアーチの要石である。その場所からは隆起状遺物の断片（10×9cm）も出土した。するどい突起は幅4cm、深さ2cmの楕円状の溝で分割されている。2点の断片資料は同じ種類のものであり、彫刻の一部である可能性が^{訳註49)}ある。白色漆喰の各断片は、素材と層の厚さ（1cm）だけを示すものであり、いくつかの断片は2層構造で、2cmの厚さであった。

石製建築部材（図 XXIII～XXIV、2、4）

彫刻が施された数多くの石の断片（バラ色や灰青色の砂岩でかなり脆い）は、東側の部屋の南東隅および直交する南壁の傍らでは、床上ではなく、深さ0.25～0.45mの地点の瓦が混じった埋土の中から出土した。反対側の端では、空想獣「獅子」像が表された板状の断片が、^{訳註50)}建物の西壁から西へ3.50m、深さ0.30mで出土した。^{訳註51)}蓮やさまざまな建築部材の石製の板状の断片は全部で23点発見された。

蓮台〔蓮華座〕（図 XXIII-6）

出土した断片のなかで最大のもの（27×15cm）は、足の一部が残る2つの蓮台の断片である。^{訳註51)}6点からなる細かい断片と合わせると、2段の蓮弁の正面をなしている（蓮華上部の高さは12cm、直径55cm）。花卉の下半分は一部分だけが残存していたが、それは上の蓮華に移行する箇所にあたる。この彫刻の典型的な特徴は、2段の蓮弁の蓮を強調し、特徴的に仕上げられた花卉、隆起して動きのある基台、大きく広げた足（実物大の1.25倍の大きさ）であり—これらの特徴はすべて、これが仏像の蓮台〔蓮華座〕であることを示している。発掘区Ⅰで出土した、波状毛と高い肉髻（5cm）をともなう頭部（径26cm）の断片（18×11cm）は明らかに上述の彫像の一部である。

石板〔板状の石製品〕

厚さ10.7cmの分厚い板状の石（仏像も同じような石で製作されている）に彫刻された浮き彫りである、小片2点—菩薩像を刻出した石板〔板状の石材〕の右上端（15×10.8cm）と仏教の空想獣である「獅子」の像（17.5×7cm）—のみが出土している（図 XXIII-2、3）。

菩薩像は、幅3cmの右縁に隙間なく配置されている。縁の上部は残存していなかったが、石材の厚みからみると、この縁と像の頭部の間の間隔は1cmないし1.5cmであるものと判断することができる。〔菩薩〕像は胸部までしか残っていなかった（〔石材の大きさは〕9.8×6.2cm）。顔の輪郭は、ややふっくらとした唇を除けば、ほとんど摩滅している。顔は大きく、肉付きがよく、額のまわりの髪には刻み目がつけられ、高い肉髻も同様である。長く伸びた耳たぶには、両肩にかかる大きな円形の飾りが付けられている。右手と肩は欠損しているが、左側には衣服

の上部の紐が確認できる。石板〔板状の石材〕は表面のほか、側面や背面もよく研磨されている。

2番目の断片には動物の「獅子」の一部が残っていた。それは座った姿^{訳註52)}で描写され、あたかも、現存高8.7cmの石板の下縁部に座っているようである。「獅子」の像の残存部分は、1) 後背部と頭部を欠損した、前半身と二重のたてがみの体軀の一部、2) 太い右前脚、3) 肩までもちあげられた左前脚、4) 右脚の爪である。浮き彫りの厚みは2.5cm～0.5cmである。すべての石板〔板状の石材〕は、石板〔板状の石材〕の下縁が5cm分、何らかの建築部材に嵌め込まれていたと考えられる。というのも、石板〔板状の石材〕下部の色は明るく、まるで新しいもののように見えるが、反対に、上部の3.7cm（〔菩薩像が彫り込まれた〕右縁と同じ幅）は、石板全体と同じように黒っぽくなっていることが確認できるからである。このほか、石板〔板状の石材〕下端には斜めの刻み目が確認できるが、強固に固定するために施されたことは明らかである。

亀の甲羅が彫刻された石製の建築部材の断片が2点出土した。そのうちの1点は、8×3cmの小さな断片で、厚さ3.2cmの灰色砂岩製で、ていねいに仕上げられた石板〔板状の石材〕である。石板〔板状の石材〕の端部には亀の像が彫刻されているが、後脚と尾だけが残っていた。亀の甲羅〔部分〕^{訳註53)}は残っていなかったことから、浮き彫りの全体の厚さ－もっとも高い部分－は不明である。尾と脚から判断すれば、〔厚さは〕少なくとも1.5cm以上であったものと推測される。石板〔板状の石材〕の底面には、斜めの浅い柄穴がある。この技法は、出土したほとんどの石彫の断片－「獅子」の像の断片－に見られるものである。なお、扁平な蓮華座〔蓮台〕の下面については後述する。

もう1つの亀の彫刻の断片は発掘区Ⅰで出土した。この〔大きさ〕10.5×12.5cmの断片は建築部材の一部であり、おそらく、バラ色〔赤〕紫色砂岩^{訳註54)}で造られた柱頭の角にあたるものであろう。幅10.5cm、高さ5cmの弓形の部分には、上方から〔下方に向かって〕彫刻された亀の浮き彫りがあったが、この彫刻の左前足と楕円形の縞模様だけが残っていた。〔もう1つの彫刻と〕同じように、平たい部分にはおそらく亀の甲羅が続いていたのであろう。縞模様〔部分〕^{訳註55)}からは、左右に分岐する装飾された刻線が彫り込まれている。これら2点の亀の彫刻の残存部分

から復元した寸法は、いずれの像も共通して8×8.5cmの大きさである。

実在する生物の石彫として最後に挙げられる断片は、重厚さに満ちたものである。幅5cmの中に、三方向からよく見えるように〔彫り込まれており〕、爪が半分折れた鳥の脚が交差したもので、背面は斜行刻線が施された縁になっている。これは明らかに仏教の守護神に属する空想獣、神鳥ガルダ〔迦楼羅天〕の脚であろう。

最後になるが、蓮台と立方体の柱頭〔宝塔の一部〕、そして球の断片が出土している。3点の建築部材のすべてに共通する特徴は、それらの固定方法である。すなわち、それらはすべて、それぞれの中央部に〔軸を差し込む〕特別の穴が開けられており、丸い軸〔棒〕で固定されていた。

蓮弁（図 XXIV-4）

もっとも大きな断片（16.5×20cm）から推測すれば、径40cm、高さ10cmある幅広の蓮弁の彫刻が残っていた。中央には直径7.2cmの穴が穿たれ、その周りには幅3.5cmの一段高くなった環が彫り込まれていた。環の円周から重なりあう2枚の蓮弁が出ている。長さ13cmの上部は平坦になっており、その下により小さな2個の蓮弁がそれぞれ蓮弁の脇に配置されている。蓮弁は中央に下から斜めの線条が施された方形の幅広の凹み（1.2cm）を有するが、これは蓮が方形の台に固定されていたことを示している。蓮弁の形は、それが目の高さより下におかれていたことを物語っている。蓮弁の縦の輪郭が残る別の2つの小断片では、蓮弁はより緻密に仕上げられている。しかし、それらの形状と比率は大型断片と同じである。ただ1列目の葉の幅だけは大きく、最初の例では、ちょうど6cmだったが、これは7cmであった。下の平坦部は1番目の蓮の断片の場合と同じく固定するための凹みをもっていた。おそらく、この2つの断片は1つの蓮の表面と裏面であると考えられるが、それらが2つのまったく同じ型の蓮の断片であることも可能性として排除するわけにはいかない〔つまり、別々の蓮台である可能性があることを指摘している。〕。

〔柱頭〕（図 XXIV-2）

収集され、いくつかの断片から復元された高さ10.7cmの柱頭、あるいは先端部は、下部の半分の立

方体（大きさ 11.6×6.5cm）と方形の枠（大きさ 15×15cm）、それが囲む直径 11cmの半球形訳註56)の上部からなっている。それぞれの面には様式化された蓮の葉が三葉あり、それが枠をなしている。固定するために開けられた孔の中央は直径 6.5cmで、側面には斜行刻線が残っている。

球

直径 2cmの柄穴をもつ、直径 9cmの石製の滑らかな球の 1/3 が出土した。球の両極には切断された面〔平らに加工された面〕があり、建築〔構築物〕部材の芯に通された継ぎ目にあたる何かの中心部であったことを示している。

最後に残された小さな断片について、その形状と彫刻のどの部位にあたるかを特定することは不可能である。それゆえ、〔それに関する〕記述については省略する。

陶〔土〕製の建築装飾

建築装飾に属するものとしては、建物の外壁の装飾である陶製パネル、コーニス、プレート〔板状の石材〕を取り扱っておく必要がある。これは、部屋の内部における装飾に含まれる上述の部材と対比されるものである。

コーニス

赤色の胎土からなる陶製コーニスの断片には、深く刻まれた長方形の溝とその下方の円形の貼付け〔文様〕訳註57)がある。もう 1つの断片にも同じような溝はあるものの、円形の貼付け〔文様〕はない。最初の断片の裏面と側面には、固定するために完全に開けられた穴があり、2つめの断片には、コーニスの平面に垂直に作られた長形の小さな棚状のものがあ訳註58)る。

陶製パネル（図 XXV-4、5）

屋根の先端の瓦の端を覆う円形パネル〔瓦当〕訳註59)の断片が数多く出土した。これらはすべて灰色の瓦当であり、文様によって次の 3グループに分けられる。1) 直径 12cm、厚さ 2.3cmの瓦当。中央に位置する装飾の円形部分は直径 8.3cmで、その周りには小さな珠文がめぐっている。7弁の蓮弁の浮き彫りがスタンプされている。訳註60)蓮弁の芯は円形を呈し、その中に 8個の珠文があり、そのうち 7個は同じように円

形に配置されているが、1個は中央に位置する。2) 直径と文様は同じであるが、外側の丸い珠文はやや大きめで、蓮弁の葉は小さく、外枠の端部がジグザグ線をなしている。蓮弁の中心は上述の瓦当と同じ形をしている。3) 直径はやや大きく 14cmで、装飾の円形部分は〔直径〕8.7cmである。装飾文様は 3つの同心円の帯からなり、その帯のなかには、別の帯にあるのと同じ形のやや大きめの珠文で埋められている。このような文様の瓦当の断片は 1個しか出土していないことから、おそらくこの〔種類の〕瓦当の数は少ない〔ものと考えられる〕。

装飾が施された瓦（図 XXV）

灰色および赤色を呈する屋根瓦の完形品はすべて大きさが異なっている。瓦の 1つは、細い先端部訳註61) 11.3cm、中央部 14cm、最大幅 15cmで、全長は 33.5cmである。

すべての灰色の瓦は、その一端が繋ぎ合わせるために玉縁となっており、装飾は施されていない（この調査では装飾が施された灰色瓦は 1枚も出土して訳註62)いない）。

赤色の瓦には繋ぎ合わせるための溝〔玉縁〕がなく、その多くが装飾され、薄型に分類され、平面形では、幅が広く、より正確な長方形、あるいは台形を呈している。訳註63)

長さ 36cm、一端の幅が 19cm、もう一端〔の幅〕が 22cmの瓦の中央部には、あたかも土の上にコンパスで描いたように、直径 10cmの正確な円の中に 7弁のロゼットが描かれている。

これと同じようなタイプの瓦〔平瓦〕（長さ 33.5cm、幅 15cmと 23cm）の 1つは、角が破損しているものの、様式化された 2羽の雄鶏が装飾されている。雄鶏は「アーモンド〔巴旦杏〕」風に描かれ、〔もう〕1羽については鶏冠と羽枝に似たような形状で描かれている。この「雄鶏」には小さな十字の印が付けられている。絵は、土が乾かないうちに、鋭利な道具で線を引いたもので、手書きで描かれている。隆起と円文をもつ赤色の瓦は試掘坑 4で出土しており、すでに述べたとおりである。

繊細な絵が描かれた薄手の赤色の瓦の小片はその上端部だけが残っていた。ハート形の花文様で、上方には 3つの円があり、その中には十字が描かれている。花文様の上に、焰あるいは羽の形をしたジグザグ文がある。残念ながら、断片がきわめて小さい

ために絵の内容について述べることは難しい。^{訳註65)}とはいえ、その手法は中国の絵画の手法を思い起こさせるものである。絵は先が鋭い棒で彫刻されている。

幅の広い平瓦の下部の右角にあたる断片には、草の茎から幅の広い葉が伸びている大きな花が描かれている。茎の根元に2枚の細長い葉がある。瓦の端部は、まるで額縁のように、小さな円形のスタンプで囲まれている。^{訳註66)}

完形の赤色平瓦には、おそらく指で記された銘文と思われるものが、弱々しいものの、くっきりと描かれている。A. N. ベルンシュタムによれば、ウイグル語である。別の瓦にはサンスクリット語の銘文があった。^{訳註67)}

陶板

ここでも陶板の2つの断片が発見されたが、厚さは4.3cmで赤色粘土から作られ、円形のような大きな絵が描かれていた。^{訳註68)}その中央部は幾何学文様（そこには格子状の文様の一部が残っていた）で埋められ、シンメトリー〔対称的に〕に配置された幅の広い葉をもつ植物の枝で囲まれていた。絵はスタンプ（あるいは彫刻？）で描かれ、反対側〔裏側〕は平らで部分的に磨かれていた。植物の枝は仏教の *Hinca biloba* という聖なる植物の枝を想起させる。^{訳註69)}〔この資料はまた〕発掘で検出された建物の機能に関する私たちの仮説を裏付けるさらなる証拠である（図 XXVI-5）。

発掘区Ⅱで検出された建物のプランや建物をめぐる回廊、蓮台に坐す装飾された彩色塑像断片、灯明皿、風貌が非常に独特な彫刻石像断片の出土、さらには日用品の欠如（出土した水差しと桶の一部は、〔別な場所から〕この場所に運ばれてきた可能性がある）から判断すると、この建物が11～12世紀に、他地域から来た職人たちによって建立された仏教小礼拝堂であった〔と推察できる〕。もしくはそれは地元の職人たちによる建築であった蓋然性もあるが、この時代の東トルキスタンの宗教施設を完全に模倣した様式であった。

小礼拝堂の復元と、おそらく仏教僧院の一部であったと思われる発掘区Ⅰで検出された住居址の一部との対比を明らかにするためには、これらの建物の発掘を継続し、トルトクリ全体〔の構造〕を解明する必要がある。

訳註

訳註1) ここで言う「シャフリスタン」は東西方向に隣接する2つの都市遺跡のうち、西側に位置する、現在、シャフリスタン1と呼ばれている都市遺跡である。かつて、西側に位置する都市遺跡は「シャフリスタン」、そして東側に位置する都市遺跡は「ラバト」と呼ばれていた。このラバトが、後述の「契丹区」にあたる。近年の発掘調査の結果、このラバトは中国の唐王朝が建設した碎葉鎮城であったことが明らかとなった。そのため、現在では、西側に位置するシャフリスタンを「シャフリスタン1」、そして東側に位置するラバトを「シャフリスタン2」と呼んでいる。

訳註2) なお、図版一覧では「カラキタイ区」、つまり、「西遼区」という名称も用いられている。

訳註3) カジミヤカが作成した地図（補図5）によれば、「△1」、つまり試掘坑1は、西壁のやや北より、壁が西に向かって屈曲している地点にあった丘であると推定されるが、正確な位置は不明である。補図1（1967年に撮影された航空写真）によれば、西壁が切れている部分の高まりに発掘したような痕跡が観察されることから、試掘坑1はこの地点にあった可能性もある（補図6参照）。

訳註4) 字義は「四角形」で、壁で囲まれた方形の区画を意味する。この区画は、現在「シャフリスタン2a」と呼ばれている方形の区画ではなく、シャフリスタン2aの南西側に位置していた方形の区画、つまり「ベルンシュタムの仏教寺院＝AKB-0」が存在していた区画を指すものと考えられる。補図1、2および後述参照。

訳註5) カジミヤカが作成した地図によれば（補図5）、シャフリスタン2aのやや南側に「△2」の記号、後述の試掘坑3、4については、その北側に同じく「△3」、「△4」の記号が記されている。しかしながら、1940年の調査ではこの北側に隣接する丘に発掘区Ⅱが設定されていること、また、この調査で確認された建物は「仏教小礼拝堂」と推定されていること、さらには発掘区Ⅱに設定された「東側のトレンチは1939年の試掘坑3と試掘坑4まで伸びていた」こと（後述参照）から、カジミヤカが作成した地図に記載されている「△2、△3、△4」の位置は誤りであると考えられる。記述によれば、この試掘坑2は、現在、AKB-0あるいは「ベルンシュタムの仏教寺院」と呼ばれている地点に位置していることは明らかである。おそらく補図7で確認される発掘区の痕跡の南側に位置する小さな掘削の痕跡がこの試掘坑2にあたるものと推測される（補図8参照）。また、Bernshtam 1950: Таблица VII-6 に記されている右側の発掘区の南側に位置する小さな四角もまた、試掘坑2を示したものであろう。それゆえ、後述の試掘坑3および試掘坑4は、この試掘坑2の北側、つまり「仏教小礼拝堂」が検出された地点に設定されたものであろう。

訳註6) コーニスの字義は「柱の上の梁部にある水平材」。

訳註7) 「素焼き製のコーニス」が Таблица XX-3 の遺物で

あるなら、この遺物は、塑像の菩薩像の装飾を作るための型である可能性がある。

訳註8) 原文は、несколько угольных пятен。

訳註9) 試掘坑3および4については上述のとおりである。

なお、試掘坑3と4の位置関係については不明であるが、発掘区ⅠとⅡの番号の付け方を考慮すれば、試掘坑3が西側、試掘坑4が東側にあった可能性がある。

訳註10) 見出しでは、「試掘坑4および5」となっているが、上述の通り、試掘坑4は別な地点にあり、また、以下の文章には試掘坑4についての記述はないことから、この見出しは誤りで、正確には「試掘坑5」であろう。なお、「(1940年)」と付記されていることから、試掘坑5における調査は「1940年」に行われたのかかもしれない。

訳註11) ここでいう「トルトクリ」は、上述の試掘坑2、3、4および発掘区Ⅱが設置された「小規模のトルトクリ」ではなく、シャフリスタン2のほぼ中央部を占める長方形の区画、つまり、現在「シャフリスタン2a」と呼ばれる区画を指すものと推測される。補図1、2参照。

訳註12) この試掘坑5の位置を特定する手掛かりはきわめて少ない。しかしながら、シャフリスタン2aの内部に位置し、かつ「北側部分にある直径23mの丘」に設置されたという記述に基づけば、補図1で確認されるシャフリスタン2aのやや北寄りに位置する2つの円形の高まりのいずれかであると推測される。

訳註13) サブトレンチを指しているものと思われる。

訳註14) 試掘坑6の位置を特定することは難しいが、この記述に基づけば、試掘坑6は、いわゆる「ベルンシュタムの仏教寺院」の2つの発掘区、つまり発掘区Ⅰと発掘区Ⅱの北側に位置する小高い丘に設置されたものであり、また、「北に約60mの場所に位置する」という記述があることから、「ベルンシュタムの仏教寺院」つまり、仏教小礼拝堂の北側に位置する丘に残された痕跡が「試掘坑6」であると考えられる（補図1参照）。

訳註15) 原文では、лощенные = burnishing。

訳註16) 「黄色磨研土器」は、これまでの帝京大学による調査では確認されていない。「表面が黄色で、円滑」というのであれば、黄色、もしくはベージュ色のスリップ（化粧土）が掛けられ、表面が円滑に仕上げられた土器を指しているとも考えることも可能である。ここでいう土器片が、いわゆるカラハン朝期に属するものであれば、これまでの発掘調査で出土している土器とも適合する。

訳註17) 原文は、ангоб = slip。

訳註18) 後述によれば、「内側に布目痕が残った多数の灰青色土器片」という記述があることから瓦もしくは灰色焼成レンガ、つまり磚の破片である可能性がある。その一方で、「胎土は屋根瓦のような灰青色をなし」という記述もあり、屋根瓦は「瓦」として別に認識されているとも考えられる。しかしながら、帝京大学によるこれまでのシャフリスタン1およびシャフリスタン2の発掘調査では、灰青色の「土器」の出土例は極めて少ないことか

ら、ここで言う「灰色土器」は屋根瓦の破片を指しているものと考えられる。なお、図版XXXVI-2は、内面に当て具の痕跡が残る「灰色土器」であると考えられることから、これを指している可能性もある。

訳註19) 写真からは判断できないが、大きさからみて練り土で作られた「タイル」で、床面に敷かれたものであろう。

訳註20) おそらく、「波状文や指頭押圧痕」をもつ把手が貼付けられた、いわゆる煮沸容器、鍋を指しているものと考えられる。

訳註21) 図VII-7によれば、おそらく、この「仕切り壁」というのは、ベンチ状遺構（スーファ）を構築した際の「仕切り壁」であろう。部屋側、あるいはベンチ状遺構の内側を掘り抜いたため、独立して存在する仕切り壁のように見えているものと考えられる。図VII-7に基づけば、壁に沿ってベンチ状遺構が構築されていたものと推測されるが、部屋の中央部にベンチ状遺構があった可能性も否定できない。

訳註22) この文章の意味は明らかでない。上述の仕切り壁がベンチ状遺構の境界となる仕切り壁であるとするれば、「崩落した日干しタイル [の破片]」はベンチ状遺構を構築する際に内部に埋められた可能性もある。なお、「部屋全体」ということであるなら、そうではない可能性もある。

訳註23) おそらく瓦当（丸軒瓦）のことであろう。

訳註24) 原語は、キルギス語の「кесы < кесе」である。白色下地に緑色釉と透明釉が掛けられた施釉陶器と考えられることから、大型であれば、「碗」か「鉢」であろう。

訳註25) 次の文章にある「壁の方向に沿って拡張された北側の空間」という記述によれば、中央に位置する東西方向の厚い壁に直交する2本の壁（東側の壁は、西側の壁よりも厚い）を指しているものと思われる。しかしながら、方向は「南東から北西方向」であり、記述と一致しない。

訳註26) これが地山であったのかは不明。基壇であった可能性も考えられる。

訳註27) 原文は、каналы-каны（カナルィ・カーヌィ）。カーヌィとは床の中に敷設した、熱風（煙）を通すための細長い管のことで、中世の「床暖房」システムを示す。ベルンシュタムによれば、このシステムは西遼を興したカラキタイによってこの地にもたらされた。以上はキルギスタン科学アカデミー考古学研究所のヴァレリー・コルチェンコ氏のご教示による。なお、加藤九祚博士もアク・ベシム遺跡の仏教小礼拝堂に関する抄訳で、「炕」（オンドル）の存在を指摘している（加藤1997：147）。また、吉田豊教授から、ソグド語のkanは「掘る」という意味の動詞で、同じ動詞はヤグノビー語（Yaghnobi）にもあること、オンドルに類した設備がウイグルの都のカラバルガスンやベンジケントにも存在した可能性についてご教示をいただいた。これらは、かつては宗教用の火の施設と見做されていたが、寒い地域にだけ見られることから、暖房用の施設と考えられる。

訳註28) 原文は、маленькие хозяйственные помещения。ここでは「貯蔵用の小部屋」と訳した。

訳註29) 原文は、чайник「急須」。この記述からすれば、図XX-6の遺物を指しているものと思われる。

訳註30) 加藤九祚はベルンシュタムの報告に基づき、アク・ベシム防壁内の僧院址の部屋は壁につくられた「炕」（オンドル）によって暖房された、と説明している（加藤前掲書）。

訳註31) この「楕円状」のものが瓦かどうかは不明である。いずれにしろ、竈や炉の底部に敷かれていたものであろう。

訳註32) 中央アジアでは、現在でも練り土を叩きつけて壁を作る工法がある。

訳註33) 図VII-7によれば、入り口の東側、東西方向の壁の東寄りの場所に2つの竈、もしくは炉があり、その間に壁が構築されていたことが確認できる。

訳註34) ここで言う「完形」は、字義のとおり完形品ではないが、以下、原文に即して完形と訳した。

訳註35) 原文は、пиала。

訳註36) 記述に基づけば、図XX-7の遺物を指しているものと思われる。「白色釉」というのではなく、白色の化粧土の上に透明釉を掛けたものであろう。

訳註37) 「水筒」と訳した語は、原文は、мустахара である。ここで述べられている遺物は、図XX-1～2である可能性がある。

訳註38) 図XX-4であろう。

訳註39) 後述によれば、「火災の痕跡」が確認されていることから、本来は灰色の瓦であったものが「火災」という2次焼成によって赤色に変化したものと思われる。

訳註40) 原文は、уступ-скамейка。

訳註41) この記述に基づけば、この「土層」は基壇の層であった可能性がある。

訳註42) 「レンガ1個分」ということなので、「cm」ではなく、「m」の誤りと思われる。この部分の記述の意味は不明であるが、壁とこの「突き固められた」の間には「0.20m」の隙間があったということかもしれない。

訳註43) 原文は、тагара「深鉢」。

訳註44) 原文は、бушхам。

訳註45) 文様の記述に基づけば、この「ラッパ」は、図XXVI-1を指していると思われるが、図中に示してある縮尺からすれば、ここで述べられている大きさと一致しない。

訳註46) 図XXI-2を指しているのかもしれない。

訳註47) 螺髪のことを指しているものと考えられる。

訳註48) この記述によれば、「同根多枝の蓮華座」にのる三尊像の断片の可能性がある。

訳註49) 後述によれば、これらの断片は試掘坑4で出土したものである。

訳註50) 原文はΦοと記されていることから、いわゆる獅子または狛犬のことを指すと考えられるが、時代と地域に

鑑み、ここでは「獅子」と訳した。

訳註51) 原文は、обломка。

訳註52) 原文は、в геральдической позе（紋章のポーズ）だが、図から獅子が「座った姿（sejant）」のことを指しているものと解した。

訳註53) 武則天は「玄武」、つまり亀を重要視しており、身分証である魚符を廃し、亀符を採用していることから、ステラ型の仏像の彫刻に亀を描かされたのも何らかの特別な意味があるものと思われる。

訳註54) 「宝塔」のこと。後述参照。

訳註55) 原文は、ребра с косыми насечками。

訳註56) この遺物は「柱頭」とされているが、小型の石製仏塔の覆鉢部である。

訳註57) 図版XXIV-3を指しているものと思われる。なお、図版XXVI-4も類似するものである。

訳註58) 原文は、прямая полочка。

訳註59) 言及されている図版番号によれば、ここでいう「円形パネル」とは瓦当のことを指していることは明らかである。それゆえ、以下の記述では、必要に応じて「瓦当」という語を用いることとする。

訳註60) 原文は、розетка、つまり「ロゼット文」であるが、ここでは「蓮弁」と訳した。

訳註61) 掲載されている図を見る限り、完形の瓦はないものの、異なる種類の瓦について、「すべて大きさが異なっている」としている可能性がある。

訳註62) 原文では「ラッパ口の溝」となっているが、これは丸瓦の「玉縁」の部分の指しているものと考えられることから、ここでは玉縁と訳した。

訳註63) 形状に関する記述に基づけば、ここで述べられている「赤色の瓦」は平瓦を指しているものと考えられる。その一方で、これまでの帝京大学の調査によれば、瓦に絵が描かれている例はきわめて少ないことから、「装飾が施された瓦」という項目ではあるが、「装飾がほどこされた土器」の可能性もある。また、「完形の細い赤色の瓦」にウイグル語とサンスクリット語の碑文が記されていたことから（後述参照）、甕のような土器を「赤色の瓦」と認識している可能性もある。なお、赤色の瓦というのは、もともとは灰色の瓦であり、2次焼成を受けて赤色に変化したものであろう。

訳註64) 図版XXV-2を指しているものと考えられる。この図版を見る限り、これが「雄鶏」を描いたものとは思われない。むしろ、戯画として描かれた、口を大きく開けた人物の顔の左側面のようにも思われる。

訳註65) この記述に基づけば、この遺物は図版XXVI-6であろう。「ハート形の花文様」は茎から両側に伸びる葉、3つの円で描かれたのは「花」で、「ジグザグ文」は花弁を表わしたものであろう。

訳註66) この遺物は、おそらく図版XXVI-1を指しているものと思われる。

訳註67) 図版のキャプション（Bernshtam 1950: 155）によれば、

ウイグル語の碑文が記されたものは図 XXVII-4、サンスクリット語の銘文が記されたものは図 XXVII-5 であると考えられる。なお、「指で記された」と書かれているが、おそらく「ヘラ」のようなもので記されたもので

あろう。

訳註68) 図 XXVI-5 の遺物と思われるが、「陶板」が正確に何を指しているのかは不明である。

訳註69) Ginkgo biloba、つまりイチョウのことを指している。

Т а б л и ц а V I I

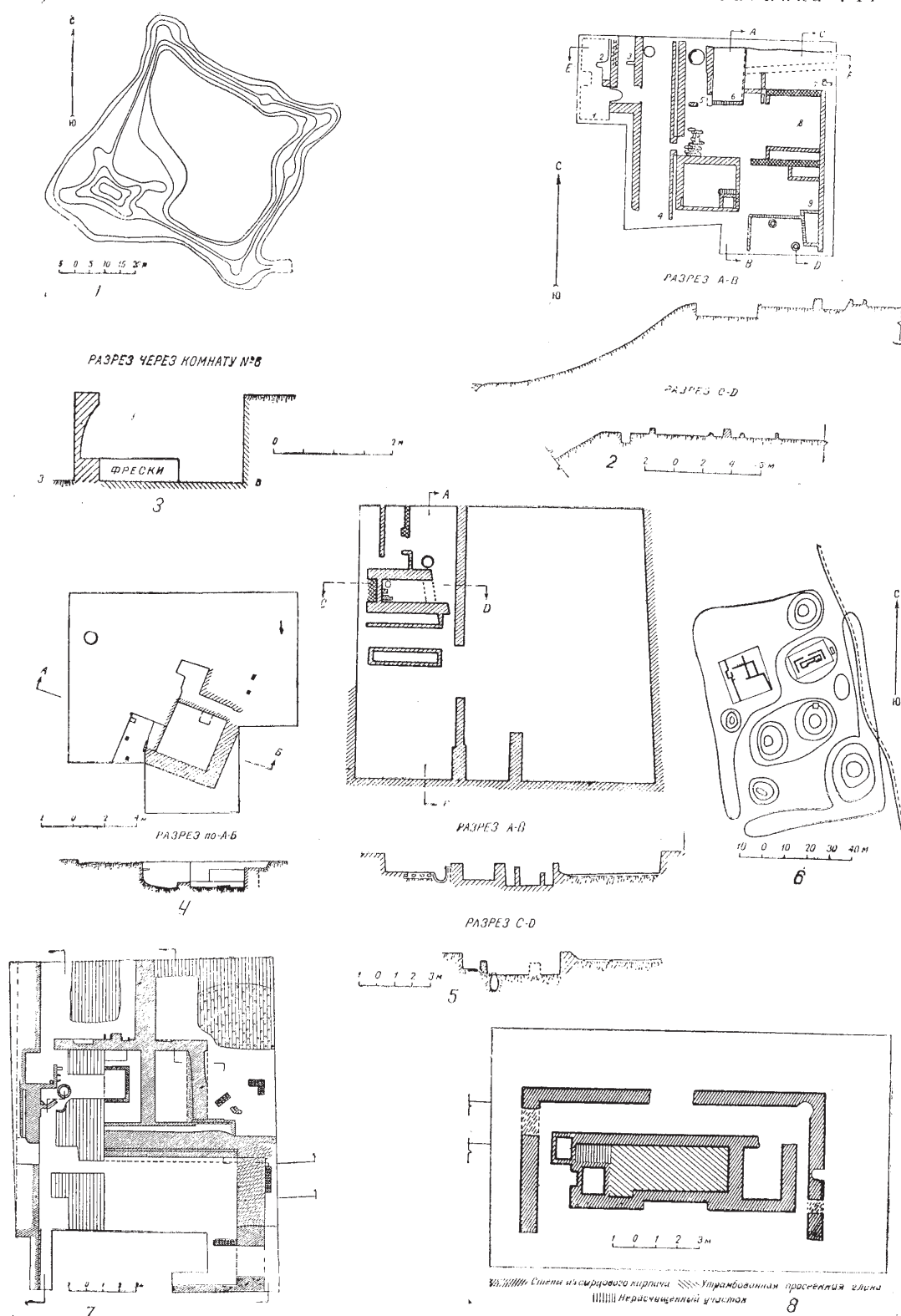


図 VII. 古代サルィグとバラサグンの都市遺跡におけるもっとも重要な発掘区の平面図と断面図
1～3: クラスナヤ・レーチカ都市遺跡における第 VIII 発掘区の平面図と断面図、4: 第 VI 発掘区、
5: 第 V 発掘区、6: バラサグンにおける発掘区の全体の平面図、7: 僧院址の発掘区、8: 小礼拝堂の発掘区

Таблица XVIII

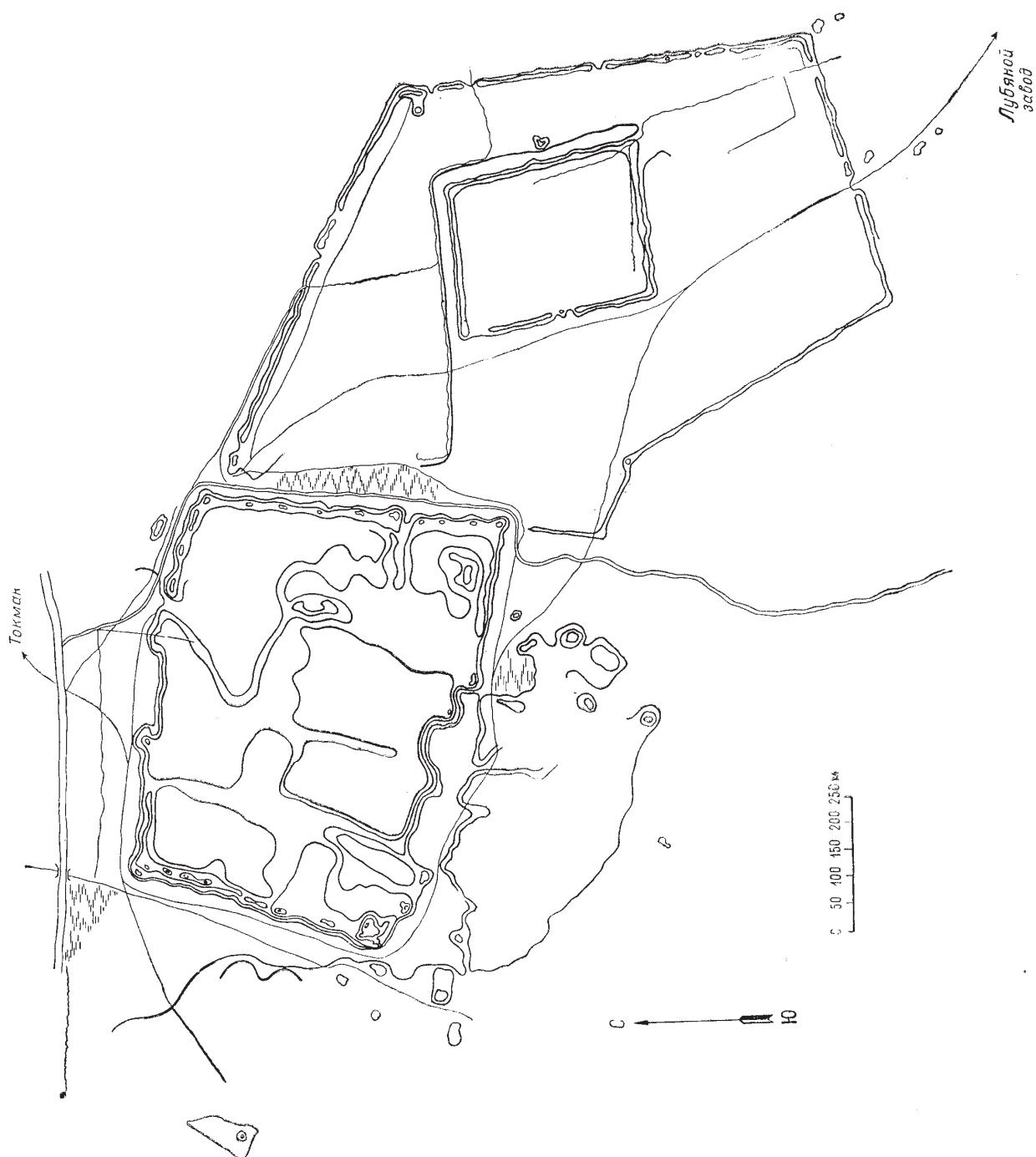
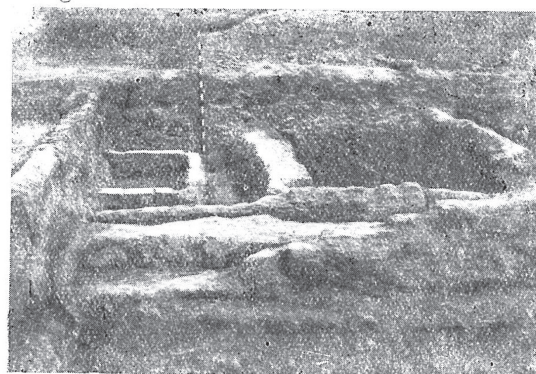


図 XVIII. 都市バラサグン（アク・ベシム都市遺跡）の平面図

Таблица XIX



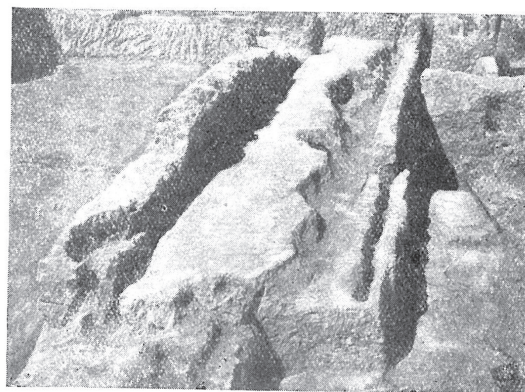
1



2



3



4



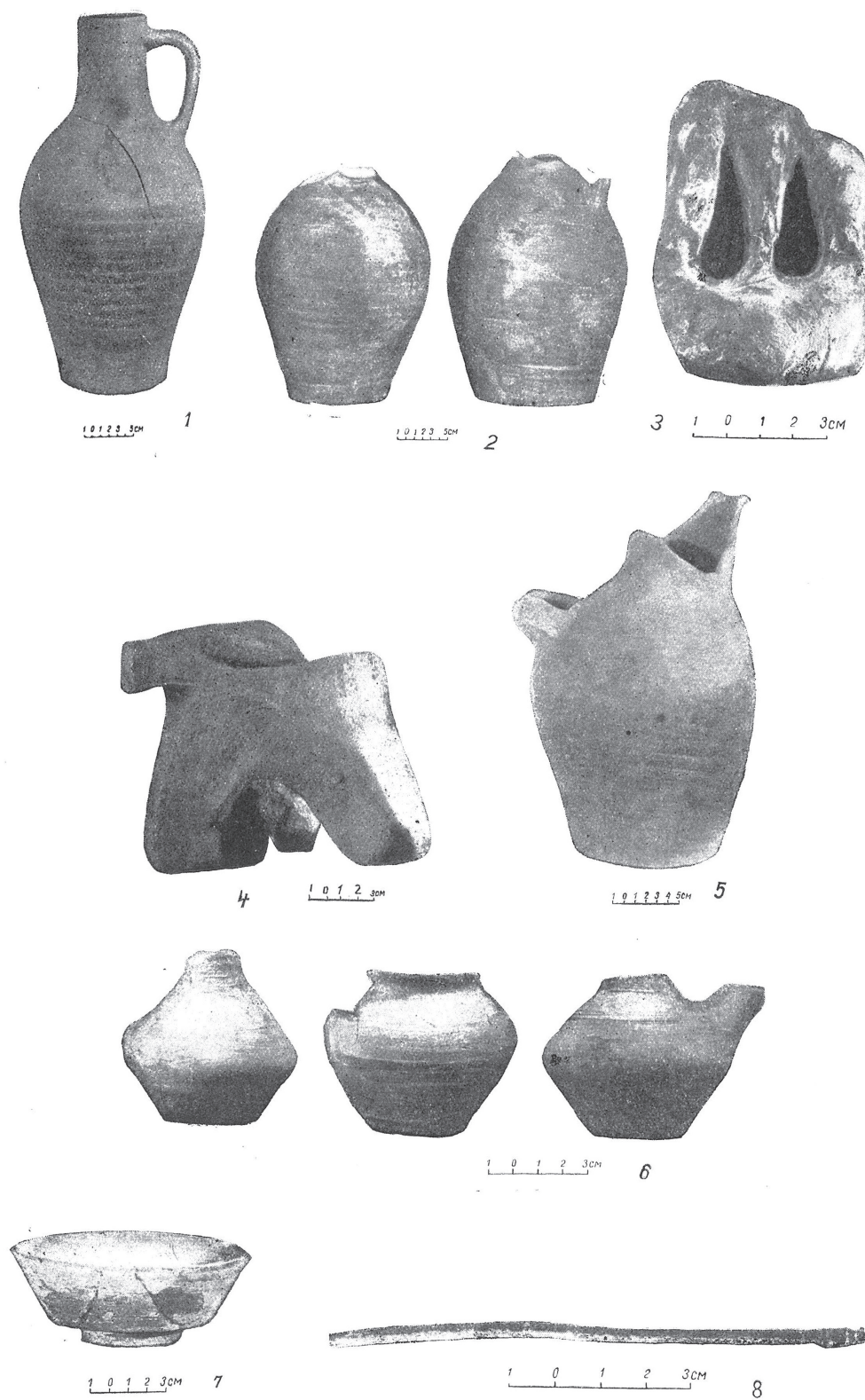
5



6

図 XIX. 都市バラサグン（2～5）の契丹区における 7 世紀〔原文では 12 世紀〕の仏教小礼拝堂（1～2）と僧院址の発掘区の外観、6：契丹区のテパにおける建物跡、日干しレンガ遺構

Таблица XX



26 Чуйская долина

図 XX. 1 ~ 7 : バラサグンにおける発掘区出土の 12 世紀の無施釉陶器、8 : 青銅製品

Таблица ХХI

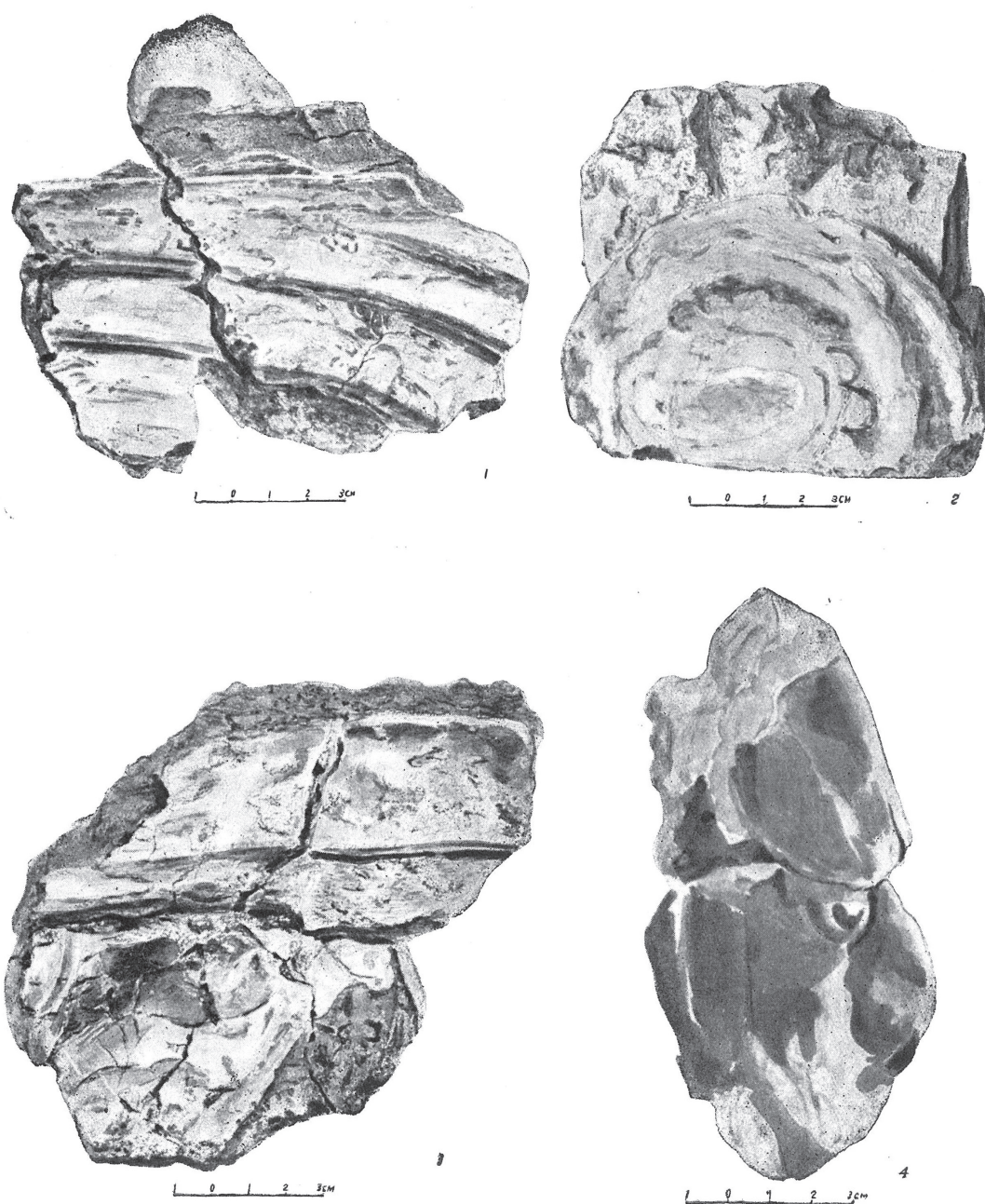


図 XXI. 彩色壁画（フレスコ）

1～3：バラサゲン出土（12世紀）、4：ジュリ出土（8～9世紀）、
1～3：M. ルッピアン作図、4：S. ソロキン作図

Таблица XXII

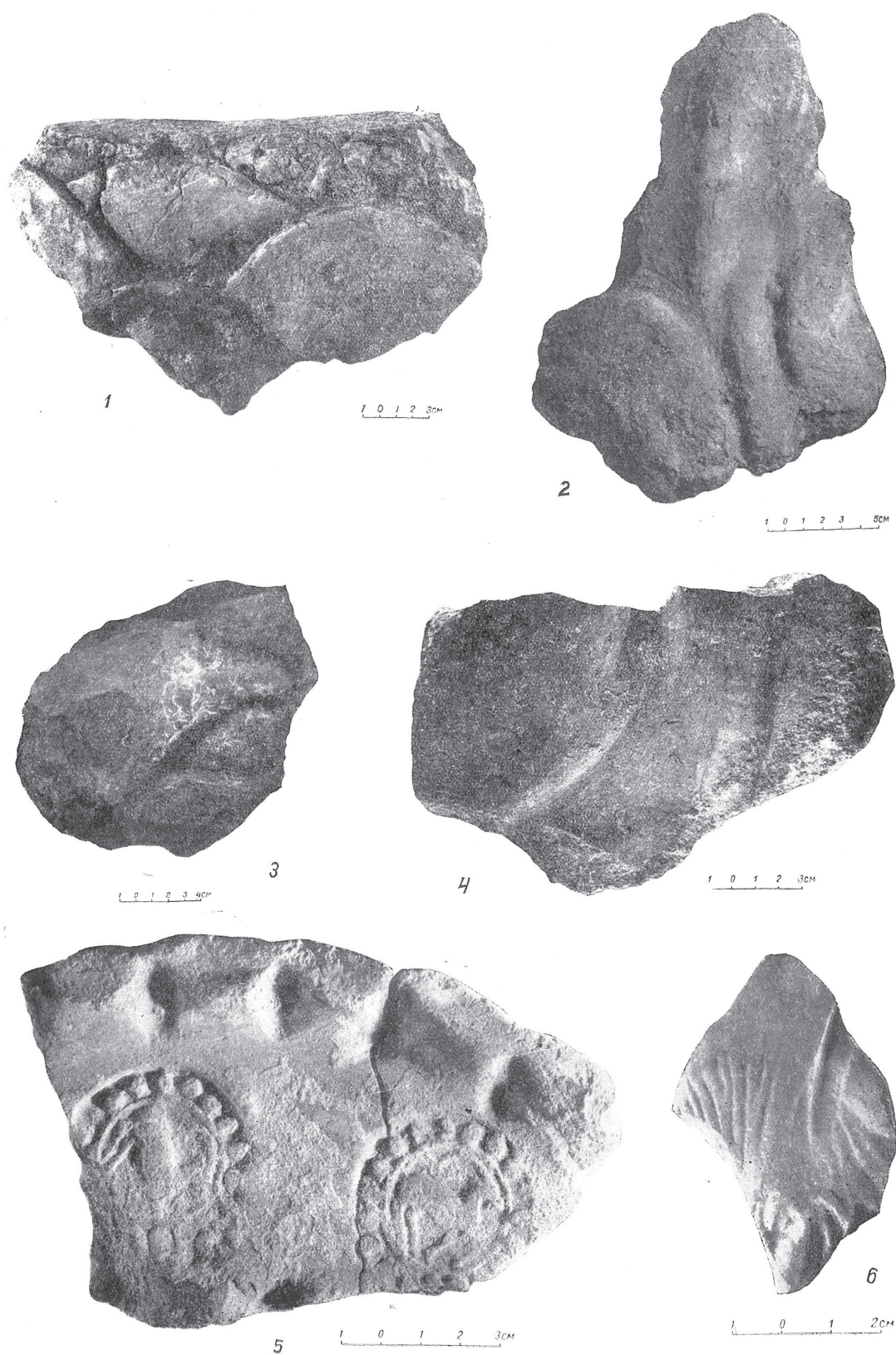


図 XXII. 1 ～ 4 および 6 : バラサグンの仏教小礼拝堂出土の日干し粘土細工品断片、5 : 卓袱台断片

Таблица XXIII

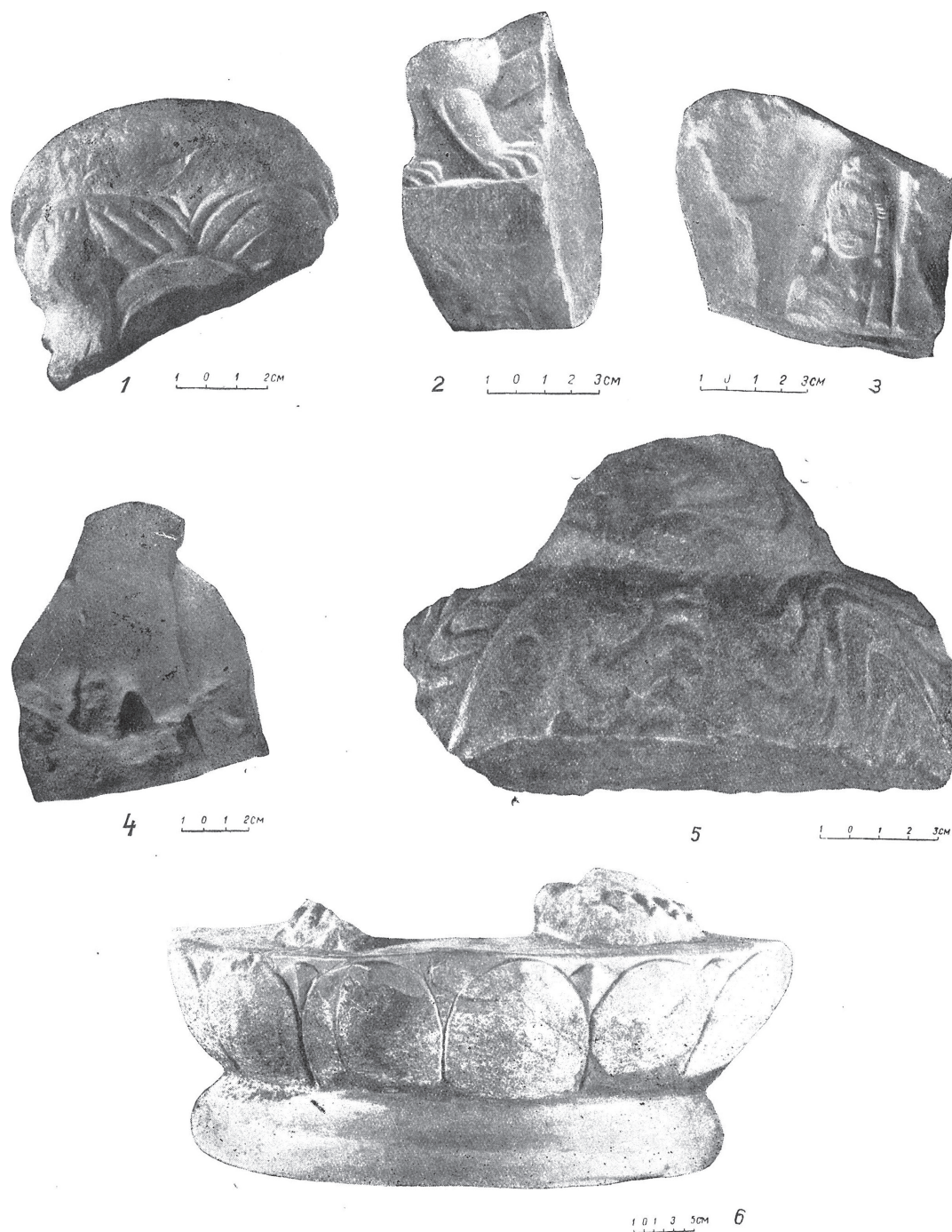
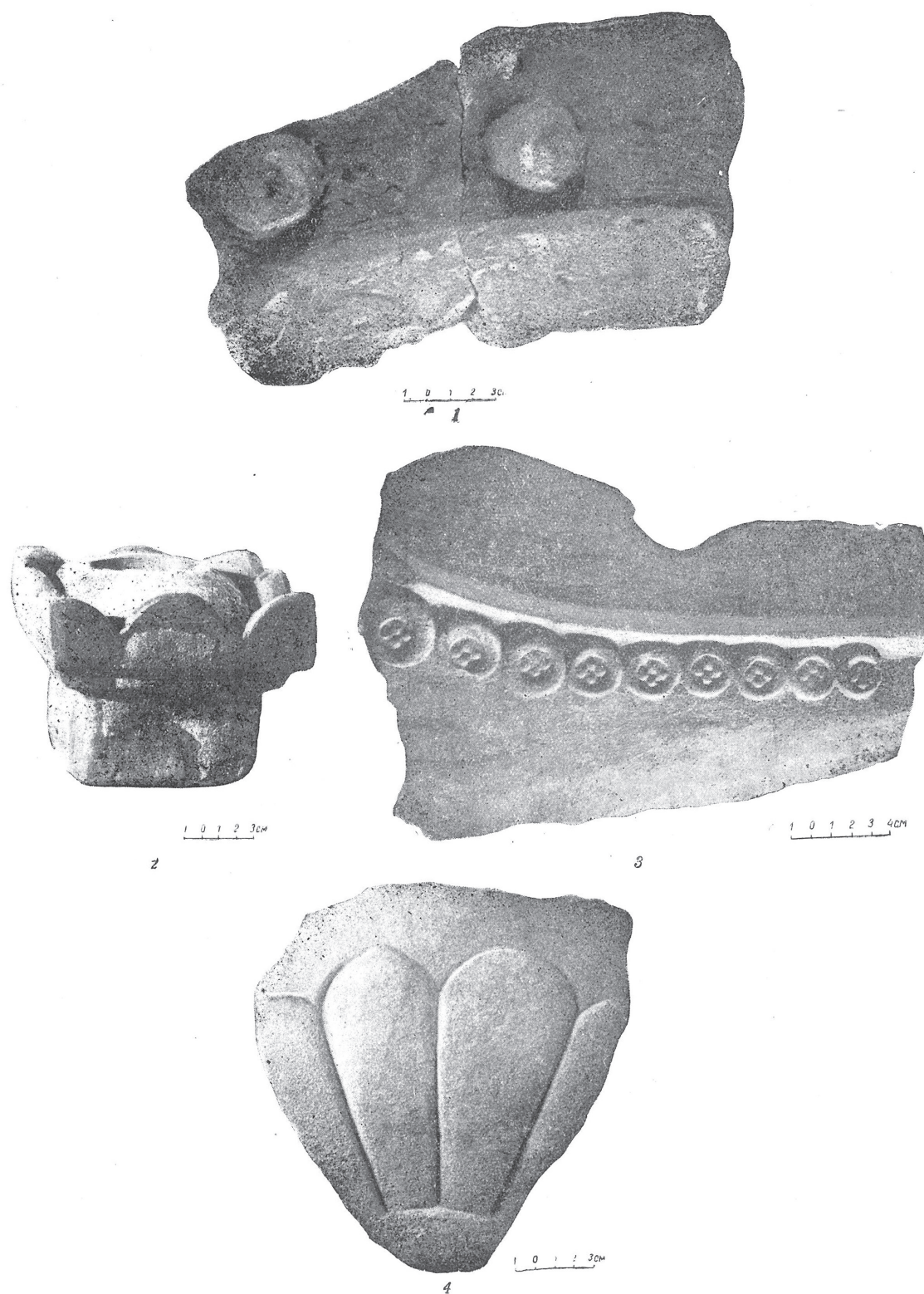


図 XXIII. バラサグンの仏教小礼拝堂の発掘で出土した石製および粘土製作品
1：石製装飾品断片、2：空想獣「獅子」、3：菩薩像、4、5、6：仏陀立像断片



27 Чуйская долина

図 XXIV. バラサグンの仏教小礼拝堂の発掘で発見された石製および粘土製細工品
1: ストウーパの傘蓋 (?) 2: 蓮、3・4: 装飾フリーズ断片—焼成粘土

Таблица XXV

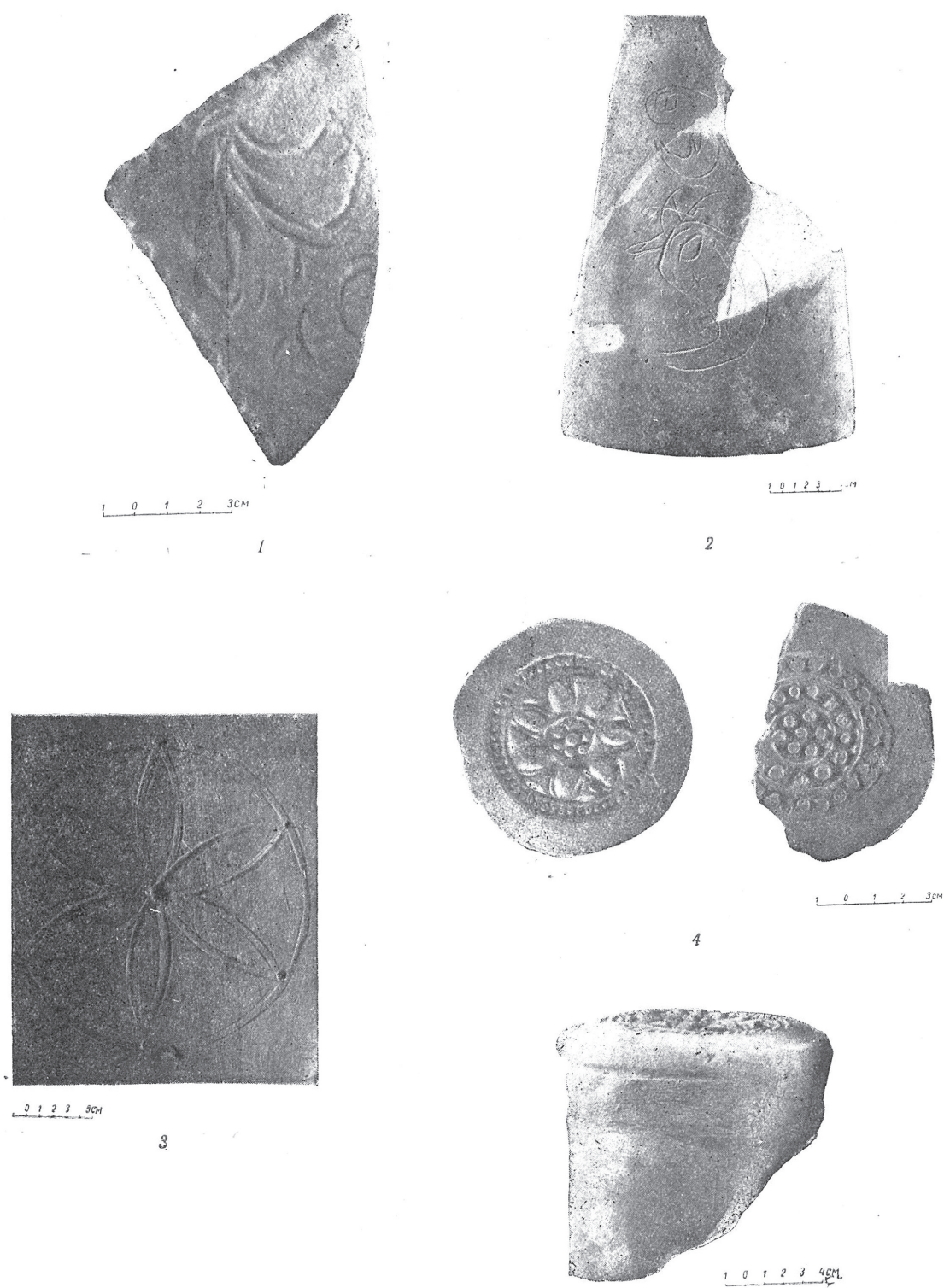


図 XXV. パラサグンの神殿の発掘による出土遺物
1～3：屋根瓦、4・5：パラサグンの小礼拝堂と僧院出土の粘土製貼付物

Таблица XXVI

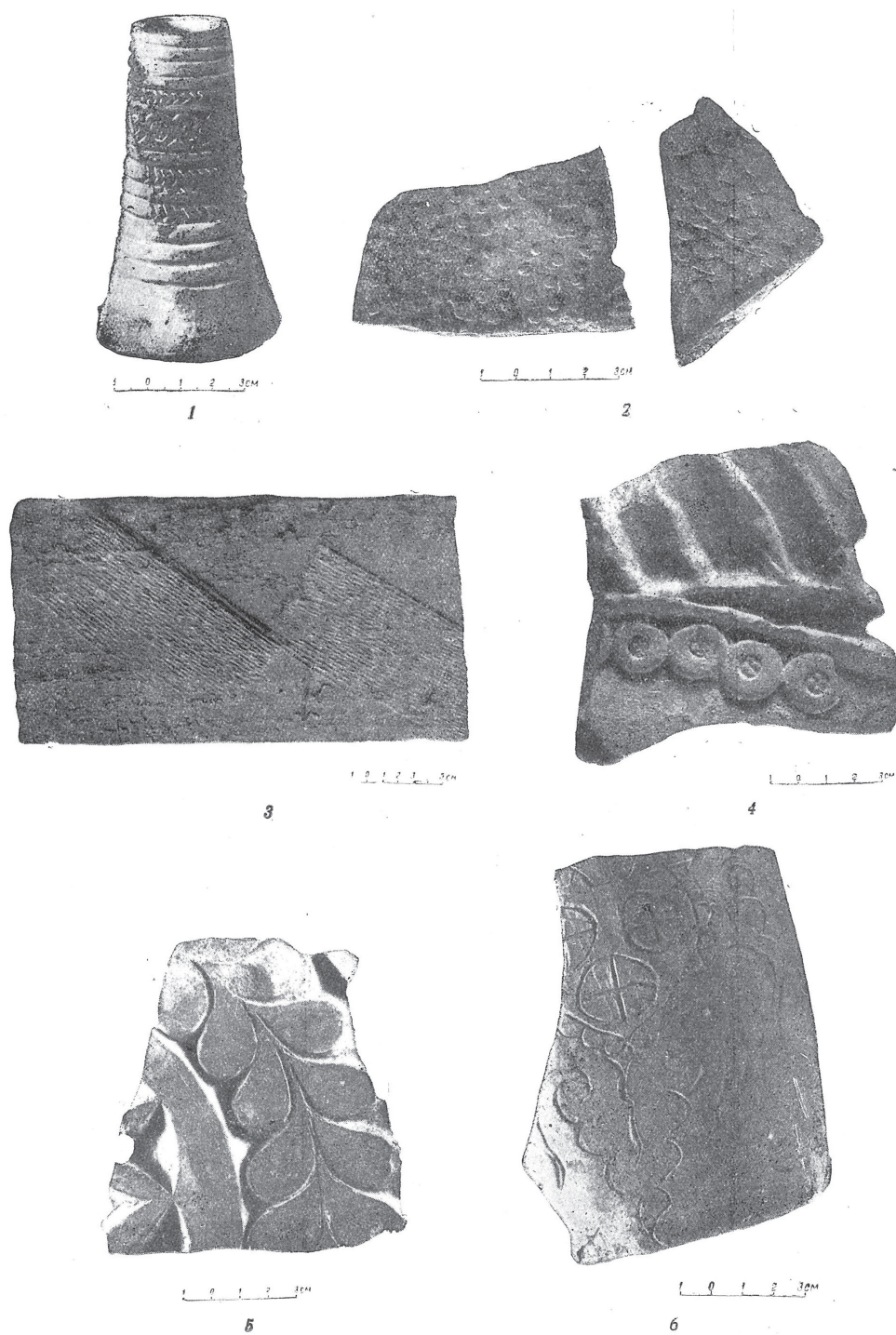


図 XXVI. バラサグンの発掘による出土遺物

1: 土管の頂部、2・3: 瓦の整形痕、4～6: 装飾プレート

Таблица XXVII

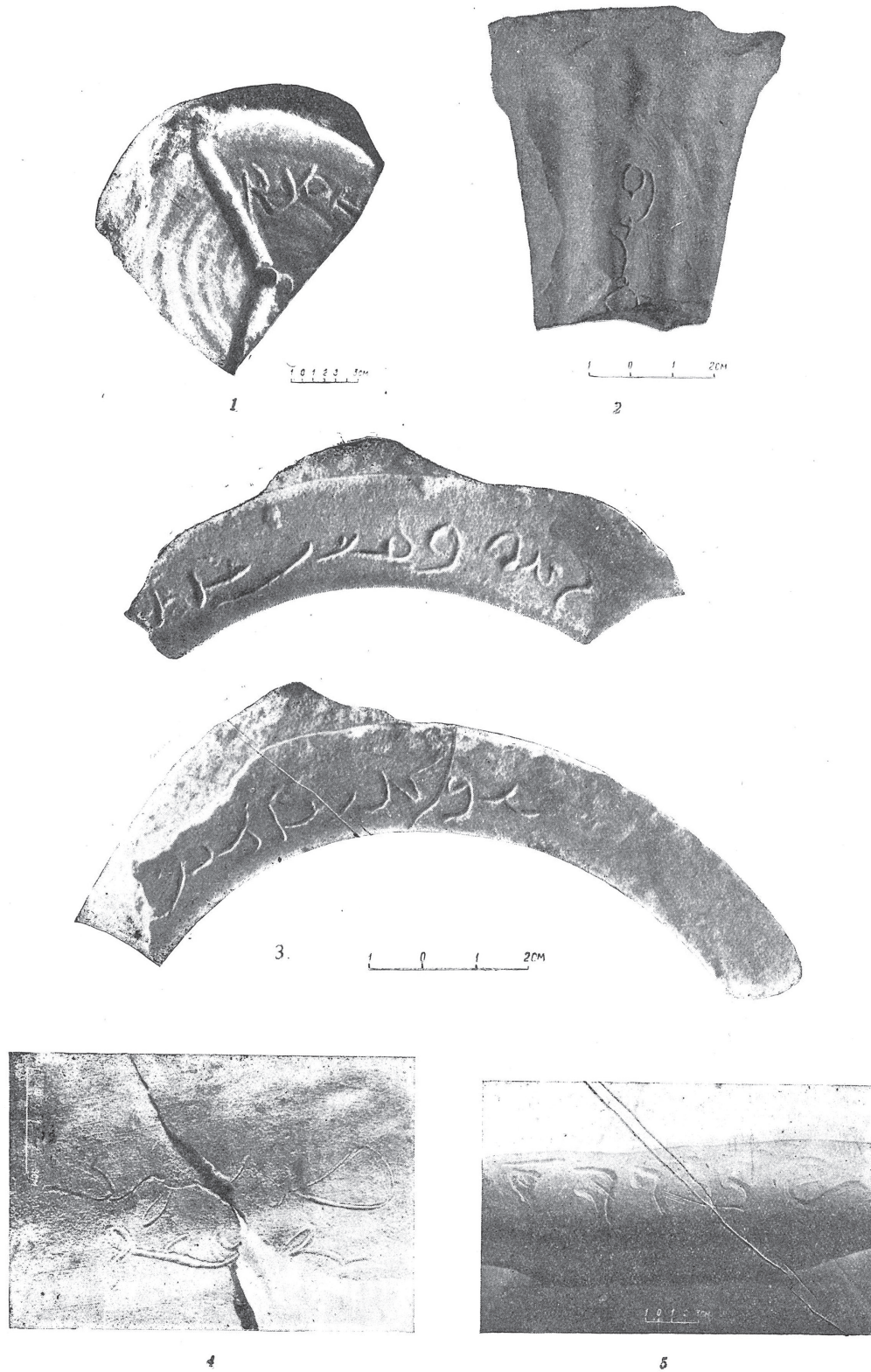


図 XXVII. 碑銘学的遺物 1：ヤカルィグ市出土、2・3：サルィグ市出土、4・5：バラサグン市出土
(1・3・4：ウイグル語碑文、2：ソグド語、5：サンスクリット)

